

く

ま

ん

ば

ち

生三子



も く じ

生きるという事をめぐって…………… 奏 政明	6
どこかでさした桜の語…………… 下山邦夫	30
雑 感…………… 小泉川千鶴	42
生きる事…………… 幸山正信	44
野次馬根性…………… 志田朝彦	48
何故急ぐのですか…………… 夜宮河童	57
友えの手紙…………… 安田憲弘	4
馬醫のことなど…………… 安江明芳	14
ある日の日記より…………… 小林玲子	10
さあ一語に歌おう…………… 安田憲弘	38
塩自由詩二題…………… 吉田三郎	39
詩 冬の日…………… 沫本四郎	40
無 題…………… 野上晴子	59

日本の歌声に参加して

平山正信

33

中央合唱団の性格について

合唱団と私雑感…………… 中沢和子	16
中央合唱団について…………… 佐条勝弘	19
誰にも楽しく歌える…………… 歌ということ 沫本宏生	22
人間交流の場として…………… 金井玲子	24
むらさき…………… 千葉 葉	26

元旦の朝…………… 松本忠雄

51

思い出…………… 羽室行彦

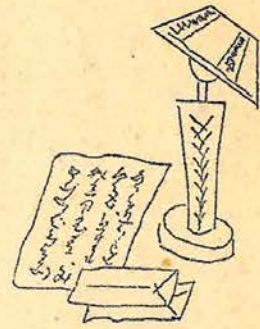
62

胃弱通信…………… 池上隆子

54

編集後記

(H)



友への手紙

エーC 安田 憲弘

れられない。

丁君、君の今住んでいる僕の故郷の地は深い雪に埋れている事だろうね、そして深い雪がすべての音響を吸収して生命のいぶきを伝えない様に、我々の学校生活の枚子も、平和を愛する人々の動きも、君の耳にはほとんど達しない事だろう。眠っている様な故郷の村落、動くのさゆめてしまったかの様な空気が……。学校が休みになり家に帰ったとき僕は何時もそう思う。

しかし向もなく春がやつて来るね、雪の下がり黒い土が又現れて来た時、僕らは裸足になつてその土を踏みしめてみたい衝動を感ずる。黑白のまだらの山々が次第に本来の色にかえつて行く、春は日増しにその緑色を濃くする……。春の匂がする……。といった人が忘

そうなると農家は急に忙しくなるね。麦の中耕、ヤマド、ヤマドに行つて大きな木々を切り倒すときは実に愉快だね。僕の兄は仔牛の調教をするだろう。僕は仔牛の鼻を持って田んぼの中を歩き廻るかも知れない。梨き返された新しい土からは白い湯気が立上る。仔牛の角は何センチ位のびているかしら？

丁君、僕等は小学校から高等学校までずっと一諾だった。しかし高校卒業と同時に僕等の生活は大きく変つたね。僕は大学に入った。君は神戸の衣料店に就取した。しかし半年と続かなかつた。親類縁者で固め上げた小規模な店、虚傳と巧滑の上に成り立つた商人の世界、人生を真剣に生き抜こうとする君にとつてそれらは耐えがたいものだった。君は故郷

に帰った。僕等は到底商人にはなり得ない。僕らは誰も虚を云わなくても良い社会の出現を願う。

君にとつて再び就取するか、それとも大学に学ぶかの二つの道が残された。学芸大学に入れれば必づ奨学資金がもらえる、月二千円の奨学資金をもらい、親せきの家から大学に通えば、経済的負担は高校と大して変りがない。……。就取は？ 今年の就取難は全くひどい。教師になる事は？ 人間的にその資格があるか？ 教師が生徒に与へる影響は非常に大きいものだ。……。僕はこう云いたい、現実を見てみよ、学芸大学の入試テストを受けらる者で、学大なら入れるだろうとが、二期の大学に適當なのがないとかの理由で、いとも無造作に学大を選ぶ者が如何に多か、そして彼らは教師となるのだ、次の社会の担い手となるぞネレシーションを教えるのだ。少年自衛隊募集に際し応募者が殺到したという事を聞く時、我々は、戦争の惨禍を知らない世代の子供達の教育という事が如何に重要な意義を持つかという事を思い知らされる。

さて、君は僕と違つて両親のちやんと崩つた家庭に育つて来た（高校三年の時、父を失つたけれども……）普通の家庭に育たなかつた僕は、普通の家庭の子供達とは幾分異なつた感覚を持つてゐるかも知れない。教師になつたとした時、その悪影響を恐れる。しかし、君はそうではない、しかも教育の重要性を痛感してゐる。君が学大に学ぶ事に僕は賛成だ。君は人生を真剣に生きようと努力してゐる。次の社会を背負う有能な人物を世に送り出してくる立派な教育者の一人となつてくれる事を願う。

もうすぐ学期末テストだ、テストが終れば春休みだ、休みになつたら僕は家に帰つて傍らう、そして君達と又、他の青年達と話し合おう、一年遅れて同じ高校の夜同部を卒業する友を心から祝福しよう。時には一緒に図書館へ行こう。今年の元旦に僕らの村が町の一部分となつてから、町立図書館の本が借りられる様になつたね。しかも町役場の一室を占めていた図書館は、あの、高校時代によく訪れた丘の上の震災記念館のクリーム色の建物の

中に移されたそうじやないか、全くすばらしい。僕等が僕等の人生を誠実に生きて行こうと努力する事が、又、お互に話し合う事が、新しい僕等の町をよりよく発展させ、ひいては、新しい社会の実現に大きな力となる事を疑わない。では又

一九五五年 一月二十七日

追伸

現在の日本の政党でなら、社会党石派を支持すると君は云っていたね。唯物論者が容易に観念論者となり得ない様に、僕等は容易にミニストにはなり得ないと此頃感じます。しかし将来取場に行つた時、オニ組合に走るという様な愚なまねはしなかつてもりですが……

生きるより死んでしまふ方がよくて

秦 政明

6

(1) 戦後の流行の一つに、自殺ということが挙げられるようです。自殺者は、それ／＼奇妙な理屈をつけて生を否定し、死を肯定しております。彼らは生きるということを、根柢から反省する哲学的求道者に自分を仕上げております。もっとも、いま僕が向題にしているのは、生活苦とか何とかの原因ではなく、もつぱら内面的な動機による、特に青年層の自殺流行についてです。この

人達の共通に提供する疑問は、人間は何のために生きるのか、生きねばならないのかということでしょう。こういう工合に向題を持掛けられてみると、さてどう答えたらいいものか、ちよつと思案します。生きることの意味をしつかりつかまないと、ただ生きていくというだけでは、自殺者の論理に従うと卑怯者ということになります。団員の諸君はどう考えておられますか。

僕は次のように考えております。

およそ目的あるいは意味というものは、この世に存在する全てのものに先立つて与えられているのでしようか。全宇宙から電子、中子に至るまで、生物をも含めて、これらは何らかの目的のために神の手でつくられたとは思えません。これらは、誰の意志によることもなく、自然自身の合法的な発展によつてもたらされた存在であります。これに反して、目的という意識は、どんな単純なものであつても、有機的生命が生れてから後にはじまるもので、まして本能的な目的を離れた、精神的に高度な目的意識は、人類の精神的財産が豊かになった近代以後に発展したものです。つまり、生きていくということ、存在を意識するということから、目的が生れて来たわけです。

僕は、かつてヒマラヤの頂上をめぐしたマロリーが、なせ山に登るのかとたずねられた時の、あの有名な言葉「山がそこにあるからだ」という言葉を思い浮べます。「山がそこにあるし、僕がこゝにいるし」という眞実

だから僕は生きるのです。

僕が過去二十数年間、生き続けて来て現に生きていくという事実を、素直に受け入れようという僕にとつては自分が向題としてゐるのは、生きるべきかいなかではなく、いかに生きるべきかということですよ。そしてこの向題への解答を、これまでの僕の存在とそれにもなう僕の意識に立脚して、探し求めていくのです。人生の目的とか意義などというものは、いつも自ら求めることによつてしか得られないものでしよう。しかも強調したいのは、「いかに生きるべきか」となどと願を抱え込んでゐるだけでは、いつか現実の自分を忘れ、借り物の觀念にひきまわされてしまふということ、人は自分で意識していなくとも、それ／＼の生き方をしているのですから、あくまでもあるがまゝの自分の生き方にもとづいて、半歩半歩、生活態度とそれへの反省を併行させて進んで行くべきだと思います。

「いかに生きるべきか」というと、大層な表現になりますが、これはかみ砕いてみ

これは、今週僕は空いた時間に、どの本を読み、どの映画を見ようかということ、親友とあるいは恋人と、何について話そうかということ、またどのサークルに出席しようかということなのです。これらの一つ一つを決めて、その人の生き方が生れて来るのですし、またその一つ一つが変わることによって、その人の生き方全体も、また変わってくるのです。どんなに立派な生き方を、人に説教し並べ立て、いても、その人の日常生活が個人的感情や好みだけに左右されているとしたら、それこそ全く無意味ではありませんか。

(2)

さて、自分の生き方を自ら見出し、自分が生きているということ、自ら意義づけ、ために、僕たちは多くの知識を必要とします。教育を身につけねばならないのです。教養と、いうのは、いわば生きるためのちえとでも呼べるでしょうか。人生と直接つながり、生き方を左右して行くものだと思いません。この外に、人間の知識には、いわば一人の人ではな

く人類全体の生きるためのちえとでも呼べる、自然や社会、人間に關する知識もあります。この両者は互につながり合っているのですが、こゝでは、果して僕たちが、自分の生き方を左右する力として、教養を身につけようとして、いるかどうかを反省したいと思えます。

世間では普通、こんな立場もある、こんな学説もあると、立場や学説を沢山知っていて、それを使うすべを知らない人を、教養人と呼ぶようです。戦後、大学に出来た教養課程というのも、社会、人文、自然と一通りの知識を雑然とつめ込むだけのことです。「学生としての良識」という言葉は、文部当局や大学の学生部あたりに重宝がられ、また学生の方もこの言葉をきくと不思議とおとなしくなります。このように教養とか良識とかの言葉のひびきの中には、非行動的な一面が強く感じられるのです。もし自分の生き方に直接つながるものであれば、それは極めて行動的なものである筈ですが、恐らく多くの人は、そうは思っていないかたようです。立派な「教養」を身につけた人が、大学を卒業してしま

と三等社算に成下るのも、もつともです。

こゝには、明治以来、変則的な発展をして来た日本の社会が感ぜられませぬ。一つには、外国の思想を受入れるとき、ちよんま作客で洋書を読むという態度で表象されるような受入れ方をした事、二つには、十年前まで読いた半封建的天皇制下の日本では、ちよつとした行動でも身辺の危険を感じずには出来なかつたこと、これらが、いまでも僕達にわざわざしているのです。これでは、僕たちの教養は、單なるアクセサリーになつてしまひます。教養を頭に受入れるにとゞめないで、自分の生き方の中へ消化してゆくことではありませぬか。こういう立場でもう一度教養について、僕たち一人一人がふりがえつてみる必要があるでしよう。そうすれば、教養を自分のものとして受止め、それによつて自分自身の生き方を変えて行く、自己改造をして行く、自己改造をして行くという妥協のない態度が生れて来ましよう。これは一人の人の努力だけではむつかしいですから、いろいろな集りで話し合う時、話すことゝして、いろいろ

の喰いちがひなどを、いつも話し合つて埋めていけば、のじやないかと思つています。話し合いの必要性が、近頃になつて特に強調されてはいますが、こうした点にも話し合いの意味が一つはあると言つて、いゝでしよう。

以上





或る日の日記より

小林玲子

晴天続きの昨令、急に冷え出した。初雪初水のニユースが続く。冬が来たのだ。冬……秋は冬に達らなる。わびしい秋から死の静寂の冬へ……生物は活動を中止する。そして自分の身を保護する。来たる春を謳うために。

冬来たりなは春遠からじ。

時々と中空に照る月。夜なのに青く澄み切つて見え見える空。ありゆる星はその輝きを失う。ついこの間は薄い手の切れどうな三日月だったのに今はまんまるになって限りない冷たさを嚴かに地上を見下ろしている。暗黒の世界を……汚れなき幼児のすや／＼眼るその安らかな霞顔を清らかに照らしている幸だろう。灯りを消す。窓からさし込む月の光で文字が

続ゆせつ。静寂があたりを包む。あらゆる生き物が息をこらしている。生きて活動しているのは私だけかしら？この静けさは私の物。夜の世界が私の許に帰つて来た。今まで明るい昼間の住人であつたものを……。犬の遠吠が聞える。静寂……。外の空気の凍る音がしん／＼と聞こえて来よう。あたりの気配に耳をすましてみる。木々が息を吐いているのかしら？何か音なき音がしている様だ。清純……。汚れなき大気……。胸一杯吸つてみたい。きつと心の中がきれいになるだろうな。生れたての赤ん坊の心の様に……。氣遣いじみた世の中からの逃避がこんな所で出来るなんて……。わづらわしい世間。虚偽と汚濁にみちた世の中。まっ直に生きようとする者が敗れ鳥處にされる世間……。

なんて苦惱に満ちている事だろう。逃避。若
い者の使う言葉じゃないつて？いやそうじゃ
ない。人間が一步足を家庭から踏み出したが
最後いゝんな危険が他人の好奇の眼が待ちう
けている。我々はそれらと闘わねばならぬ。
その様な場に於て人は自己を振り返つたりす
る事は不可能だ。人は他人の鋭い視線の前に
赤裸々な自己を保護しつつ自分の正しいと思
うものを目指して猪進するのだ。自己反省の
余裕は良々ない。そんな悠長な事をやってい
るとぞの口は惨めな敗北を喫するだろう。そ
して又半面いわゆる基準的な要求によって自
己をより良いものに見せようと努力する。そ
の努力が大きい程吾の中はますます苦しく窮
屈なものになつて行くのであるがこの欲求は
対人關係の世間を於て人間を成長させて行く
ものである。この様に世間の有形無形の闘争
に疲労しきつた自分を才一線から引きもどし
反省し不足を補い得て未だものを十分消化し
て明日への活力を補充する。この様な時向が
なければ人は氣違ひになつてしまふであらう。
この役目つまり反省の鳥現実から人間を逃避

さす役目をするのが夜である。夜は人の心を
落ち着かせる。夜は私の世界！誰も私に心
をはらわれない。私を一人で放つておいてくれ
る。私は自己の内生活に沈潜する。そこでは
私は專制的独裁者だ。私だけに許された私だ
けの物！私しか入る事を許されない。そこで
私は他人の侵入をこぼむ。侵入しようとする
あらゆるものを又それに内心を示そうとす
るものこえも嫌悪する。狂おしいまでの執着
そこで私は何をしようとかまわれない。何を
考えようと差し支えない。誰も文句を云わな
いし又誰にも迷惑はかゝらない。そこには完
全な自由がある。私は自分をつゝむ固い殻を
脱ぐ。世間の生活に固く冷たく凍りついた自
分の心を柔かくもみほぐす。他人遠隔的な生
活で傷つけられた心を治せようとする。踏にじ
られた好意に對してのいたわしとその残酷な
対象に對しての怒りが復讐がほのおとなつて
もえ上る。衝動にかりれ易い子供の様に無知
な私が発見される。誰も知らない赤裸々な自
分の姿がはつきりと現われて来るのだ。一生
の間にきつと如何なる人も私の中に見出し得

な。だろ。姿が、この様な事は何という快感
であらうか。私は内生活に於ていろ／＼考え
る。他人にそれを発表しようとは思わない。
考える内容よりも考えるところ。自体が私
にとつて快楽なのだから。考える内容は他か
らの批判も受けなければ他人の考えを考慮し
もしない。唯考えるだけだから鬼考そのも
のは非常に気遣いしめてもいようし又独断的
でもあり堂々めぐりをしてもいよう。でもそ
んな事は大した事ではないのだ。現実生活に
於ては決して満たされぬ夢と遊みているのだ
から確定的な結論の出ぬ方がつと都合がい
い。惨めな敗北傷心悲哀絶望という結論解決
は現実生活の中だけで深山。内生活に於て遠
又夢の世界に於て遠この様な結論に到達する
のなら私はこの生を断念してしまおうとす
るだろう。内生活に於ける究極は勝利であり
満足であり観音である。
静かだ。固はそのとほりであらゆる汚れを覆
いかくす。人の思索は時折病的なまでに異常
になる。風向のいらだたしさが去つて満ち足
りた安らかさがある。

お前は幸せなの？何物か目にこうと、やく。
え、今この瞬間はね。答えてしまつて一寸考
える。私は本当に幸せなのだろうか。でも幸
せつて一体何だろう。山の彼方の空遠くカ
ルスツの詩を口ずさんでみる。幸い住むと
人の云う。『幸せつて山の彼方に住んでい
るのじやない。私達が自分達の手で作出すも
のなのだ。そして現在不幸でないという事は
しりもなぶささ幸福だつて幸じやないのか。』
心の何処かで現実的な私が叫ぶ。解つてい
る。そんな事。あの詩の云つていふ事は真理か
も知れない。幸いつて探しあぐねて絶望にな
だぐむものかも知れない。でもなぶ遠くに
何か真に幸福なもの。永遠の幸せがありそう
よ。それの存在を信じている事はわるい事じ
やないわ。そうでなければそれを信じなければ
私は生きて行けないわ。非現実的でロマン
チックな私は死の灰の降る中でこう答える。
人間つてとして私つてなんてあわれなのだろ
う。幸せをたすね求めてむなしく帰つて来
らややはりまだなお遠くにその存在を信じて安
日を送つていふなんて……。勿論人類文化に貢

献しようとする意図で以て又この苦しい世の中を一日も早く住みよくだのしくする意図で以て全生涯を活動に捧げている人もあろう。しかし何か未来には素晴らしいものがありそうか。今まで求めて得られなかった幸福がありそうか。今まではかき望みを未来にたくして、犠牲で生きている人だつてあるのじやないだろうか。二十年の今まで何も起らなかった。あと残りも同じ位の年数の中で何ですばらしい事がおこる可能性があろう。こうは思つてもみる。しかし人間の未来というものが確定したものであり又それがはつきり人に解つてゐるものであるとしたら何も生きて行く必要はないのだ。未来の不幸な人は何も不幸になるために苦悩にみちたわづらわしい世の中を生きぬいて行く必要は更にならないのだ。未来に於て少しは幸福になれるのじやないか。青い鳥がやつて来るのではないだろうかとのほかない望みがあるからこそ現実の不幸をも乗りこえて生きて行く事が出来るのではないだろうか。山の彼方のなお遠く幸いに住むという事を信じる事はとりもなおさず現実の過酷さ

を冷笑する勇氣となるのではないだろうか。あゝ夜の静寂は考えを飛躍させる。

牛乳屋さんが通る。ポン／＼蒸氣の音が

聞こえて来る。夜はそのとほりを断ち切ろう

としてゐる。何だか騒々しくなつて来た。

やがて生物は目をさまし家庭は一日の営みを

開始するだろう。活気に満ちた朝の世界の展

開。より良いものを求めあく事。知らぬ活動

が今や始まろうとしてゐる。夜の想ひに疲れ

た私が出る幕じやない。私も活動への用意を

始めよう。

○

原稿が書けなないのである日の日記から引つぱり出して来た。二十九年の秋の一日である。どの様な事件が私をしてこんなものを書かせたのかその時の心理状態になるべくもないが何か私の心に激しいショックを与えたものがあつた事は確かだ。いつもこんな変な事ばかり書いてゐるわけじやないから……あくまで現実的な私の心に時たましのび込んだ非現実的な心のいたづらであらう

一月二十八日 夜



馬籠まごめの「つな」なぞ

安江明芳

らかの意味で、旅の情趣を感じる幸になるのを恐れるからだ。こゝでは、藤村の生地「馬籠」を中心に心に浮ぶ事どもをたゞ雑然と書きなぐる事にした。

この三月、万葉旅行は藤村文学を訪ねて木曾路をたどると云う。そしてその最後のスクジュール「三留野駅から中津川迄」は断片的にはあるが私がいつもたどった路である。去年の夏迄私の家はこの中津川にあつた。だから三留野、中津川向は、私の想い出の断片々々をつなぎ合せて行つたら、冬以外のどの季節でも、私のうちでまとまった旅が出来上るのである。しかし、それを書く気にはなれない。これに参加する人達にとって私の駄文が何

馬籠に藤村記念郷が完成し青野季吉、臼井吉見氏ら多くの文化人の出席のもとに記念式典が行われたのは、私が高校三年の秋（五二年）、それも、霜柱を踏み、いくらか色褪せはじめた紅葉を残念がつたりしながら峠を越してそこ迄出掛けて行つた記憶があるから、十一月も半ばだつたと思う。いつもは散雨としているその他も、この日ばかりは高級車の姿さえ見られて、田舎の村特有のお祭り気分が漂つていた。そしてそれを私自身の気分とは妙にぞぐわれないものに感じたりしたものだ。私は村の人達の会話から、そこではもう藤村は

一文学者に止らず、村人達にとつて、彼等を暖かく見守る、素朴な氏神様のような存在である事を知った。今になつて思うのだが、藤村紹介に、これ努めて来られた亀井勝一郎氏が彼の地で好遇され、その爲かあらずか氏も又、毎夏のように彼の地を訪問されるのは、こんな面からも、故ない事ではないようだ。今度の旅行に参加される諸氏よ、彼の地で藤村について語る時は、藤村と讃える時でなければならぬ事を心に留めるがいい。こんな事があつた。それはその式典の最後に、会場にあつた全ての人達によつて合唱された「椰子の実」を少し調子の変る最後の部分迄、正確に歌い続けたのは、小学生から、白髪の老婆をも含めた村の人達が殆んどと云う事だ。旅行団も、藤村の墓前か何処かで、いずれ「椰子の実」を合唱する事であろうが、もし村人達が聞いていたら、かりそめにも間違える事があつてはならない。中央合唱団員の名譽にかけたと云うのではなくて村人達の偶像をその地位から引きずり落して、彼等の平和を乱してはならないからだ。

その時青野氏などがどんな講演をしたかはつきり記憶がないが、何でも藤村は、故郷を愛した作家だ」と云う事が強調されたのは云う迄もない。私にとつて一番印象深かつたのは、詩人藤島宇内氏が落梅泉の常盤樹を朗読した事である。それは彼の力強いバスと共に今も私の耳についている。当時私は受験勉強のつれづれに大きな声をあげて詩を讀んだりしたものだ。その頃、私が好んで讀んだ立原道造や野村英夫、津村信夫の詩と共に、それからは藤村の詩も時々加わる事があつた。

その日、帰りも徒歩だつた。夜明け前に描かれ、藤村自らも愛した恵那山は、いつ、何処から見ても素晴らしく私達を魅了するのである。その帰途、落合川辺りで見た恵那山が私には一番気に入つた。又こゝ迄来ると木曾の流れをも見下す事が出来る――そこには夕ムがある。そしてこの夕ム建設に動機をとつたと思われるのが、フロレタリア作家葉山嘉樹の短篇「セメント樽の中の手紙」である。この、原稿用紙にして精々五く六枚かと思われる短篇

ににも夕暮の恵那山を描写する事によつて、その作品を一層重々しくしている様に思える。ところで思うのだが、こゝ——激しくせまつて来る時代の危機に「青山半蔵」がいやされる事なく悩み続けたこの木曾の山峽に、維新を経て今日に至つた歴史は、しかし、一体何を解決し得たであろうか？ いや問題をもちつと小さくしよう。「山の木にたよつて生きていく」木曾谷の百姓の生活を保障するのに、戦

後の農地改革は何の役に立つただろうか？
こんな問題なんどもも持つて、もう一度、古い友達もいる馬籠へ行つてみたいと、しきりにそんな事を考える。そして、それはやはりあの階段式の田圃の上手が縁に葡え始めた頃であればいい。

(一九五五年 一月廿日 夜)

中央合唱団の性格について

I

合唱団と私雑感

薬一 中浜和子

- 一 黒き瞳いずこふるさといずこ、此処は遠きブルガリヤ、ドナウのかなた
- ニ はるばる越えし山河幾千里、夢にもわすれざりき恋しふるさと
- 三 かいやくばるかんの星の下にて、幼き日の思い出、まぶたにえかく

四、くろきひとみよ、しずけき語らいよ、何ものにもまして恋しふるさと

大学に入つてそろ／＼友達もできかけた頃——昼休み講堂のピアノのまわりから聞えてくる歌声にき、ほれていたあの五月の頃を思い出します。はいりたくてたまらなかつたが男の人ばかりだったので尻ごみをしていたが文学部の女の人が入られへ紫田さんちピアノを弾かれるようになって、たの

でたまらなくなつたので入った次沖でまた音楽はもとからすぎだつたけれど、歌う方には自信がなかったがこゝに氣むずかしさは何もなく楽しい希望の歌声が私を待っていていました。氣がるに楽しく歌えるということが下手勢續ぎにとつて何よりの魅力でした。

歌うことは何といふことか、私はぞう日記に書いています。

その頃主としてロシア民謡をやつていました。ゆうつで若い情熱とロマンチズムをもつているように思つた。私にはこの国の民謡より胸に共感をよぶものであつた。そこに私は東洋の血の流れを感じた。黒き瞳、東欧の人々よ、主義を越え口境をこえよう、そして、我々は歌で結ばれたい。遠き祖先の黒き瞳を想おう！

それはうるんだ若き光をもつて今なお永遠をみつめる民族の瞳だ。

私はこんな幻想をつづつた。

合唱団の性格、そんなことを当時私は意識しなかつた、たゞ楽しかつた。

夏休みのピクニックもたのしかった。

夏休みが終つて合唱団に無邪氣に入つてゆつた。なくなつてゐる自分がわかつた。夏山以未人間の作爲というものを敏感に感じるようになった頃だつた。そしてそれを嫌悪した。

合唱団と作爲？ 片よつてゐると評されていたことでもそれは合唱団でありながら純粹に歌を煮染に結ばれてゐるのではなく他の目的の爲の手段にたゞ場が利用されてゐるのではないかという疑問がおこつて来た。

漠然と私は嫌悪を感じはじめた。従つてはじめの程に楽しくなかつた。ついには苦痛にさえなろうとした。私は自分の氣持をいつわつてまで歌わねばならぬとも思えなかつたので私は合唱団で歌うことをよしてしまつた。

文化祭もすんで符兼祭の企画が発表され合唱団も当然ながら出演することになった時、母の人がたりないからおいで／＼と半ば強制

的(極度の敏感さが感じせしめられたのがかもしれ
ない)に云われて、正直にいうと少々感情を
害していや／＼ながら出なければならなかつ
た。知っている歌だけでよいと云われて私
もどうしても歌いたくない歌はうたわぬつも
りであつた。いや／＼ながら出る自分に自己
を偽っているのではないかと自向したりした。

しかしそれから時間がゆるす限り練習にでた。
数ヶ月歌わなかつたので私は無意識のうちにも
も歌にうえていて練習に向われめた源動力の一
部として、うえた人が美味を向わす喰い付
く、的要素が含まれていなかつたとは云えな
い。しかし一方やたらに合唱団を敬遠した
る態度がうすらいでいったのも又事実だ。
歌うことは楽しい。やっぱり私は歌いたい。
歌わずにはおれない。

皆の合唱団だ、皆で話しあつてゆこうという
態度が最近になつて表面におしだされて来た
のは大変よいことだと思ふ。片よつていと
いわれても感じていなくてもそれを話しあいで直して

ゆける。

平和とか何とか云う歌は意気高揚の爲にはよ
いけれど、さつぱつとして多すぎてもいかん
とか云うことを折井さんが云つておられたけ
どだと思つた。私はロシア民謡はすきだけ
ど、平和のための斗いとか何とか云う歌も
ヴエトの歌はともすきになれない。歌うこ
とによつてその歌の愛を感じたい。

私達は平和を愛するものであるけれど、こん
な歌一つ二つは元氣よく歌つても三つ四つと
なると鼻についてくる。平和という言葉のな
い平和な(勢気のある)歌を愛している。
女の人の気持は一般にこうだと思ふのである
サタシいのではない、真の意味の平和を愛する
者だから、

自分のことを正直に書いた。幼稚と思われは
しないが、独断と思われはしないかと少々は
すかしい臭もある(思われてもよいけれど)
又おこられどうにも思ふ。しかし未学期の新

入生の爲にも中央合唱団の発展の爲にも何か参考になればと思つて書いた。

今日では皆の、私達の合唱団だという自覚が私自身に明りようになりつゝ、あるので微力ながらも楽しく歌う爲に努力したいと思つてゐる。男子は男声合唱団と二本立てであるが女子は歌いたいと思へばここ一つしか歌う場がないのでよりよき楽しき歌を望む心は切である。——独語ほつぽりだして——

一九五五、一、二十六

II

中央合唱団について

IB 佐々木勝弘

この頃は毎日歌を何か、歌わないと気が持た悪いくらいである。歌うというものは人間の人間に限られた本能と考えられる。幾千年の昔から、この民族においてもそれ／＼の音楽をもっている。そしてそれによつて悲しみを歌ひ、喜びを歌ひ、明日への勇気を起して

いつたのである。そしてその歌は現在においてもますます生きているのである。

現在の学園生活は実に味気なくなつてきているのではないだろうか。せちがらひ社会は社会の一員である学生にもひしひしと迫りよせないはずはないのである。就取難、アルバイト、ストークスも図書館もない学校、いつも減つてゐる午後の暇、ガタ／＼という教室等、枚挙にいとまもない位である。これではつい學ぶ気持も暗くなるはずである。しかし暗くなつているだけで良いものだろうか、又重大なことはこの広い大学に於て如何に友達の得がたいことであろうか。むつつりと黙りこくつて講義を聞いてすんだらすつと勝手に帰つてしまふ。この味気なさをつぶさに感じたのは私一人ではなかつた筈である。このことは、一時は昔の高校時代への時代錯誤的な憧れともなつていた。しかし、中央合唱団に入ることによつてどうゆう生活は一変してしまつた。歌うことを通じて少くとも同輩との間には、自己の殻に閉じ込めていたあの味気なさは、感じられなくなつた。だがこれもすぐそうなつていつた

ものではなかった。歌つてはすつと歸つてしまふというのが何日かつづいたからである。学園生活を少しも明るくしようではないかというような気持は中に湧いてくるような空気がなかったことを正直にいう。

やはり新団員を向えるに當つては、自己紹介をたび／＼やるとか、話をかけるとかして、その空気になじむようにしてほしかった。

それはさておき、おいおい慣れるに従つて友達も出まゝ、友と共にハーモニイをなさんと声をだし合つていると、相互の心の通じ合いを感じてくる。卒直にいつて後者の方が前者よりよくハーモニイをなしているようだが。

技術的な問題はとにかくとして私達に關してはおのおのの心の流通をはかる場として、合唱団は働いてくれたのである。この働きは、この合唱団の生命であることはもちろんである。であるからして、目指すは学校全部に楽しい歌声がひびき渡り、全員が団員になることではなければならぬ。しかるに現実にはなほだお寒い限りである。歌に全然興味がない人が多いということも考えられる。しか

しそれ以外にこの仲間に入ることをはゞむことがあるのではないか。その一つは、歌う曲が契にがたよつていふことである。その内容を見てもこれがみんなに親しみ易いものであると容易に肯定し難いものが多かった。だがこれも話し合いの会で選曲の問題として取り上げられ解決の方向へ近づいていふ。やはりこのようになつたのも、団の運営が一部の人にまかせきりであつたということに原因するのではないか。これに關連してくる第二の問題は合唱団の性質である。合唱団の性質は、すなわち取り上げられている歌といえるだろう。今思ひかえしてみても普通に考えられでいる世間的な眼を通して見れば、当合唱団は何とかと云々されるが当然であると思ふ。平和を守れ、水爆反対と叫べば赤いとみなす人々の物の考え方が問題であると思ふ。民青連についても同じである。民青連を歌つた途端におもしろくないといつて練習を抜けて出た人もいふことを知つていふ。日本の歌声とかいふものがあるといふことを新聞で見知つていふ人が一体何人いるか。これもゆく人

人が自分達の取場であつた歌をもち合つたもので平和を願う仲間の人々の切なる叫びとも考えられなくはない。そのうらに共産党が偽りて利用しているというが、それが事実としたら、何故共産党しか平和の叫びというものに耳を借さないのかというところが考えられねばならぬ。戦争反対だと叫べば、赤だという。では戦争は悪くないのか、平和が罪悪なのか、そうではないことは明白だ。何故それを叫びわゆる赤が悪いと人々が考えるのはおかしいではないだろうか。結局人々の物の考え方によるのであるが余りにも現実を見る眼、社会的意識が低いからではないだろうか。

このことが阪大北校中央合唱団に伝えることでもある。平和の歌をうたえば団員がへつていく。平和の問題が学生の実感としてひとつもきていないのである。主義主張を越えた共通の問題であるはずなのに、そのような歌を歌えば赤であり、赤に利用されているのだと考える。ということば赤しか平和の問題を取上げていないような観をなすようだが、と

にもかくにもこういう考え方が支配的であるからには、学校全体の共通の場となるべく努力しているのが中央合唱団とするなら、結局平和のうたなんか余り取上げられないだろう。そのようなうたが音楽的におもしろくないとも考えることも確かである。やはりこのことも、みんながこれをうたおうではないかともつていくのかどうかの問題である。平和への願いをこめたうたをうたわなくなつた合唱団は、その空気をすって一年もなろうとする私には、わざびのない江戸前ずしといった気もしてくることはある。

しかし、たゞ楽しくみんなが集つて同じうたを歌うということであつても、その意義は深いといわねばならぬ。歌うことによつて如何に良い友達を発見し、学校生活が楽しくなつたことか。こうして友情、理解に満ちた暖い学生生活が生れた時に、どうして平和を乱すものに対して、人々を不幸にするものに対して黙つていけるような学生がでてこよう。最後に一つ。どうかしてもう一寸、当中央合唱団も技術向上しないものだろうか。やは

リ合唱であるからには、ハーモニイのだけご味を知らねば向題にならない。どうしても時間的に制約を受けるので、各個人がそれぞれ研究していく株にしたいいものであるが、歌への興味の刺激ということは合唱団の意味の一つでもあろう。

私達の合唱団が、他のオンチコーラスと結成しようとする動きが生れて実現しそうなのはうれしい。私個人の考えとしては、阪場の人達の同じようなオンチコーラスとも交流も大切なのではないだろうか。学生と社会との結びつきは、これからは重要なことなのではないだろうか。ややもすれば、両者の間の綱は切れそうになるのである。偉大なる学向が生れるには象牙の塔にこもってはいはこれからは駄目である。国民の文学、芸術、科学、哲学が生れるには、学向の場が民衆のものになつて初めて可能なのである。その事に対する合唱団の役割がないとは決していえない。私達の中央合唱団が躍進しオンチコーラスの名譽？から助かるようになることを願つて歌つていこう。

III

誰れにも楽しく歌える

歌と云うこと

IIIC 藤本忠生

誰れにも喜んで歌える歌仲々抽象的な意味の解らぬ言葉である。しかし我々合唱団員すべてがこれを求めていることは、確かである

(本誌一号トッポに書いてある)

一体如何なる歌を云うのだろうか。

童謡。小供くさいな。もつと理想的なものが入らなければ。しかし考えてみれば童謡は誰にも楽しく歌える歌の内に入ると思う。童謡にはすべての人に思い出があろう。優しい母の姿を思いうかべること、未だあげ初めし初恋の人を思い出すこと、幼稚園の先生を思い出すこと。嘗つて受験勉強中自信の無くなつた時童謡によりその究地を抜け出た。時には童謡を歌うのもよいと思う。特筆祭の時の文一の海は荒海の踊り、この歌が好きなのににもよるが、今も眼に焼きついてゐる。

少し短い浴衣が目に見えるようだ。

流行歌。一般にまずい。しかし人生の或る

真剣な面を表現しているものもある。青い山

脈は好きだ

民謡。大変いいと思う。佐

渡おけさ。赤いサラファン

(デカンショ節もこのうち

に入るが合唱にはね)。

寮歌。残念なことに阪

大の学生歌は募集中で

現在無い。旧制の寮歌を

歌うことはいいのだが合

唱にはよくない。やっぱり

一人池の岸に立って

歌う歌だ。君が怒に我は

泣き我が喜びに君は器う。(相変らず異性向に

友情は成立せぬものと考えているが)

其他。シューベルト。モツァルト等古来の名作

曲家の作曲したものを歌うのもよい。

誰でも楽しく歌える歌。我が合唱団も五十

人を越す大世帯になったのだから誰れでも

とは殆んど無理であろう。原爆許すまじ、原

熾賛成と云う人も居るだろう。東京ペキン

東京ワシントンと歌いたい人も居るだろう。

民青年。世界の青春。かたよりすぎていると

云う人も居るだろう。我等の仲間。仲間の意

味があやしいと云う人も居るだろう。泉の

ほとり。兵士云々が氣にくわぬ

と云う人も居るだろう。し

かしオフレネリ。かつこ

う。歌もたのし。どじ

よ。舟のり。赤いサ

ラファン。ネリスリ。ス

テンカライ人。等は誰

れでも歌える歌と思える

又青年歌集のものだけを

やることは面白くないと云

う人も居るだろう。若し石にあげた歌のみを

やるならばすべての阪大生に南放された合唱

団とは云えない。歌いたい人が多く居ると思

うがその人達に入ってもらうためお互に考え

ねばならぬ。

本号に於て平山君は彼の感じた日本のうた

ごえを書いてくれると思うが、僕が先号に書



いた様な批判的態度の発祥は、歌によって
或るイデオロギーへの変換の意図が見えるか
らである。我々は「軍艦マーチ」により、「
東亜行進曲」により、無慙にも異国の露と消
えた多数の先輩を思い出さねばならぬ、(勿
論大学生なんかは何の爲の戦争であるか、よ
く解つてい事は、聞けわだつみの声でも読み取
れる)。歌は天候にも成るし又悪魔にもなる。
変な方向に変わってしまった。

すぐ新入生が入つて来る。彼等は楽しい大
学生生活を夢見ている。少くとも今の北校に於
て、我々合唱団が本當にこの願いを叶えてく
れる最大のものと思う。そのために、又我々
も共に楽しく歌うために、今度の選曲には重
大な任務があると思う。

それから男声合唱との技術提携(？)であるが
歌つて聞かせる男声合唱と本質的に異なるのだ
から、あまり型にはまったと云うか拘束され
たと云うか、その様な形になること必然であ
るから、楽しく歌うことがだん／＼薄らぐ危
険がありはしないか。僕はあまり賛成出来な
い。平山君の指揮と紫田さんのピアノで充分

であると思う。御兩人には大変な御苦勞な話
なのだが。

兎に角出来るだけ多くの人の合唱団たらん
が爲に、則ち楽しく歌うために、お互に曲の
選定に意見を待ちより、より楽しい合唱団を
作り上げようではないか、(三十、一、一五)

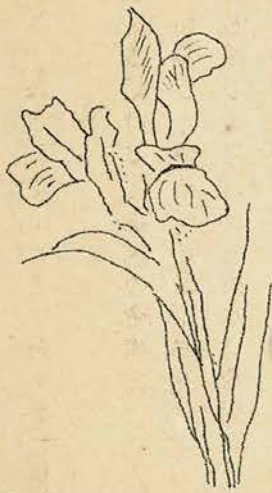
IV 人間交流の場として

金井 聆子

始業ぎり／＼に、山道をはあ／＼云いなが
ら登つて来て、教室に駆け込む。一時間二時
限と先生の御講義を聞いて昼になる。もくも
くとお弁当を広げ、食事の後、本を取り出し
て読んだり、又は二三の親しい友人と話をす
る。午飯からも黙々と授業をうけ、授業が終
ると急いで教科書ノートを鞆にしまい、家路
につく。……毎日／＼がこんな生活のく
り返しだったらどうだろう。学校生活つて
そんなものだろうか。勿論私達は学校を勉強
する爲に來ているのである。しかし私は学校

というものは学問研究のための場だけではないと思ふ。学校は学問研究の場であると同時に広い意味での人間形成の場でなければならぬと思ふ。我々は書物によっていろ／＼なことを学び取ると共に、人との交流によって更に自分を深めより広い人間として向上する。阪大では現在クラス制度がしかれていられるけれども、クラスは単に授業をうけるために一諸の教室で勉強するという他に、あまり人間同志、互いに親しくなる役割を果しているとは思えない。「人間同志の交流」私はこの点にもサークルの重要性の一つがあると思ふ。では私達の中央合唱団ではどうであろうか。なる程、昼休みには皆んな愉快そうに楽しく歌っている。又昨年待兼祭やコンパ以来皆の間に親しい雰囲気が出たことは確かである。しかしながら現在では、昼休みの時間は単に皆が集つて来て歌うだけに終つてゐる。(時間が短かすぎるせいもあるが)勿論中央合唱団と言う限り、皆で楽しく歌うことは重要である。というよりもそれはカ一義的なことである。が私はその他に人間的な結びつきの場であ

あつて欲しいと思ふ。いろ／＼な問題をだしあつてみんなを考えて行く。皆で話し、あの人もこうゆうことを悩んでゐるのだ私と同じだと云ふ事になり、親近感を増す。お互いにもっと親密になれて、深い人間的結びつきが出来たら、合唱も今の何倍かすばらしいものになるのじゃないでしょうか。お互いの心の通ひ合う合唱です。現在幾分話合う雰囲気が生れて来ているようですけれど、まだ／＼一部のものにしかすぎません。私達合唱団の中で皆が裸になつて話合えるようになるにはまだ／＼程遠いことでしょう。私は中央合唱団が皆で楽しく歌う場であると同時に、その歌を通じて人間交流の場であつて欲しいと思ふのです。そしてそういう場として、北校に来てゐる人達の間にもっと開かれて欲しいと思ひます。



むらさき

千葉繁

歌は恐しいものである。

何故ならそれはしばしばある目的への手段として使われ必らず効果をあげるからである。即ち人間なら誰しも有するリズムへの喜びの本能を巧みに利用するのである。それは少々の理性など押流してしまう。歌によってかもし出される独特の雰囲気には正しい理性も入るすまがなないのだ。例えば戦争中の軍歌である。僕達は戦争について何も知らぬまゝに大君のためと歌い大東亜建設のためと歌い何んで生命が惜しかろうと歌った。戦果は直ちに歌となり全国に広まった。勿論僕等は戦争の意味など知る筈もなかつたが学校でたゞき込まれた戦争教育思想はこれらの歌を通じて更にはつきりと頭に入っていたのだ。日本の空気が軍歌で汚れ、それが日本人を包んでいったのだ。いつのまにか僕達は日本人は正しい戦争をしているのだ。采英は地球から追いやられさねばならぬ。そのためには生命なんか惜

しくない。大君のため国のためだ。」と信じだしたではないか。更に恐しいことにあの悲惨な戦場のありさまさえ我々にはあつともむごい事だなんて思はれなかつたではないか。むしろ僕達は戦いに出て敵をやつつけることにあこがれたんだ。

勿論歌だけがこうさせたというのではない。しかし歌がこうした気分を作り上げるのは、はかり知れぬ力を出したことは華実である。そこには理性も批判もないただ気分である。

日本人は軍歌によつてかもし出された気分にあこがれていたのだ。これこそ当時の軍部の思うつぼだったに違いない。彼等は盲目的雰囲気にある国民を充分利用出来たのだ。

現在の革命歌についてもまた然りである。戦い「赤い血」等い生命をとすこれらの言葉が戦いを肯定しているということだけではないうる。また、それを歌う大衆から流れる気分を、指導者がある目的への手段として狙うという点で往時の軍歌と全く等しく見ることが出来るのである。更には、愚かなる考へか

も知れぬが今日、全国に拡がりつゝある、歌声運動にも同様のことが云えると思うのである。さてこゝで我々の合唱団について考へて見よう。阪大北校の生徒に中央合唱団について問えば、おそろく殆んどが中央合唱団には政治的匂いがありしかも左翼であると答えるだろう。僕達がこのように見られる理由には次の三つがあると思うのである。

(一) 歌に口シヤのものが多い。

(二) 歌の内容が労働とか平和とかに關するものが多い。

(三) 合唱団が学外の平和運動に關係していると思はれる。

事実僕達の合唱団には善悪は別としてこのよ
うな臭があつたのである。ところで一月ニ七
日の適合いの会ではリーター始めだいたい今
までの傾向に批判的であり、合唱団本来の目
的は一人でも仲間を加え学園を明るくするこ
とであるという意見が多かつた。これには僕
も反対しない。中央合唱団が学生から気嫌い
されてはその存在価値がないと思うからであ
る。だから今后その方向に進むとすれば(一)(二)

の臭における問題も解消するだろう。

しかし問題は(三)である。一体平和とは何か。戦争が無いだけでは平和とは云えないが目下の所では戦争を起させないことが最大原則である。今の世界を見るに両陣營の争いの根本は唯一つ、共産主義がその性格上根拠があることに伸びぬとしてるのに対し、資本主義がこれをヤツキとなつて居ようとしていることである。従つてお互いに相手から脅威を感じて軍拡競争をした所で問題はちつとも進まないのであつて、その先棒をかつぎ我々が一方の陣營から平和、平和と叫ぶのも馬鹿氣にことなのである。我々若いものは大きな目で世界を見ねばならぬ。二つの陣營に愚かな戦いをせぬよう反省してもらはねばならぬ。突を云うと僕は暴れることが好きだ。高校時代には受験勉強で体が衰弱し(とまでいかぬが)フラ／＼だったにも拘らず、学内対抗の柔道試合に出て骨を折つた経験もあるし今もある運動クラスに属している。だがしかし人を殺した事はない。戦争とは何んだ。同じ人間が殺し合う事ではないか。しかもそこには何か

美しい名をつけている。「正義の爲」「自由を守る爲」「解放のため」「人民のため等々、だがいくらも一ともらしい名をつけても戦いは戦いだ。末末は我々が造る。立派な社会を作るため努力することは僕達青年の権利であり義務である。だのに何故「平和」と云えば「赤」と来るのだろうか。一つには「赤」の人達があまりにも自己流勝手に「平和」と云う言葉を使うからだろう。彼等の云う「平和」は先に書いた一方的「平和」に過ぎない。だが僕達はほんとうの平和を求めねばならぬのである。

今「民青連」の代表が来日中である。この雑誌が出る頃にはもう帰つてゐるだろうが、僕は一月二三日彼等を大阪駅に出迎えた。代表は人波にもまれながらやつと小高い場所に立つことが出来たが、その間僕はイタリヤ代表と握手した。勿論僕だけにしてくれただけではない。手が届けば誰れにでもしてくれただけからちよつとおうちが下る。しかしその手を通して相手の熱情が感じられた様な気がした。「民青連」はオニ大戦後連合国の青年がよりよい末末を作ろうと手を結んだのだそうだ。

立派なものではないか。健康な社会を作ろうと努力するのだ。だが、これも見る人によれば赤く見えるらしい。彼等は實際赤いのか、彼等もまた一方側からの平和を叫んでゐるのか、それなら僕は搦手を返して来る。

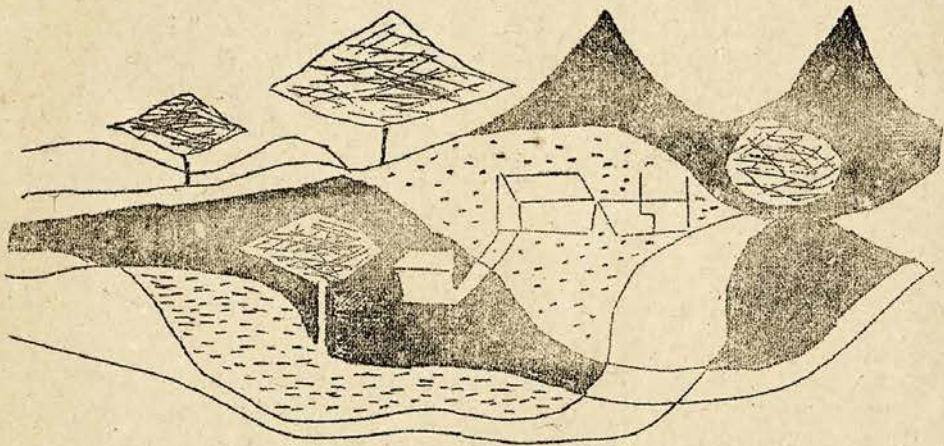
原水爆反対運動についてもそうである。原水爆に反対して何故悪いのか。良い社会には不要なものではないか。アメリカに反対するのでもなければロシアに反対するのでもない。原水爆に反対するのだ。正しいことではないか。(三)をこう考えて来ると僕にはわからなくなつて来る。原水爆反対を赤だと思つてゐる人には「原爆許すまじ」は歌えないだろうし……。

中央合唱団とイデオロギー。難かしい問題だ。僕等は(三)についても話し合いたいと思つた。最後に、日本のうたごえについてであるがもしそれが株本君の感じたように「政党あるいはかたよつたイデオロギー」に支配される傾向があるなら、そんな所へは参加すべきでないと思つた。

平山君は代表としてどう感じたろうか。くまんばちに発表して載さなうと思つた。

比頃はどうしても以前のようない種のもじや
きさで歌をうたえない。
ホウノ、ホウノと怒鳴っても、前のように心
からは朗かになれないのである。

(一月二七日手が冷い深夜)





何処かで聞いた様な話

II B 下山邦夫

何処かで聞いた様な話です。あの時とこの話を一語にした株だと思われるかもしれませんが、とうのは實際沢山あるという事なのでしよう。又実際に沢山あるからこそ大問題となる話なのです。小説の種にはならない。

皆聞いた事がある株でも、もう一度聞いて下さい。もう飽きた話だというならあなたはその状態になつたとしてごらん下さい。少しは身近に感ぜられませう。僕としては身近にそのまゝ感じて戴きたいのです。

僕の郷里は岡山県の北部の津山市です。そのこと鳥取を結ぶ汽車があります。その世紀の汽車が津山を出てニッ目が高野、その次が滝尾です。このどちらの駅からでも二里ばかり

今度津山市を合併された高倉村があります。家は平安時代だろうかと思われる家です。小屋です。勿論タタミ等ありません。田は畑田ばかりです。貧農なのです。高野駅近くの中学校の学区です。その教師をしている僕の姉の話です。「先生、高倉あんなで津山を合併せにやあいけんのか、税金が高こうなつてうらゝメシが喰えんばあじやし社会の教師である姉は何と答えるべきでしょうか。「そうなんじや、村の人はちつともえゝこたあありやせん。せえでも津山が合併させようとしたん。その時村の人をもつと考えても良かったんです。『そねえこと』でも、津山が引っぱりこんでしもうたんじやがな」この質問は答えの言葉を与えない。全国的に地方自治体を大きくし中央財政のしわよせでもある。こんな説明はわからないだろう。又校長敬頭も

居る。教頭は「あんためちつとロマンチックにならにやいけん。大津山が発展する事を云はにや」といふ。どうしてそんなロマンチックになり得よう。高倉の山の奥の子供は、この駅近くの学校へ二里を歩いて通う。全く大津山である。その間には山がある。その山の向うの貧乏村の子供は弁当を持って来ない。昼の時は運動場に日なたぼっこをしている。ほかんとしている。学校へ来れば叱る先生が多い。成績が悪いため、乱暴だからといって、途中の山の中で山ナスびを喰ってアケビをさがして暴れている者が面白い。

「おえもう今日は行くまあやのう」行つたつてうらあ、あの先公にぼっこせつきょうくうばあじやし「うらが荷うしい天狗寺（山名）えきんのういつたらう、ぼっこえほら穴があつてのう、そこへ行こう」

家に帰つては働き通しである。近隣の村に手伝いに行く。湿田は一毛作その一毛作も悪い。田植の時は、殆んど足が壊つてしまふ。その田も一軒に二、三反。

六月に入るとその村の子供が一人未なくなつ

た。

「校長先生一月も休んでいますがどうしまし
よう、私が行きましようか」高倉えな、そ
りやあんた行く争あない、あねえとこえ行け
ますもんか」でも子供は毎日通つてゐるん
でしよう」それや高倉の子はなれとります
けん、他の子にでも聞いて下さい」

丁度そこへ、その村の一回が帰りがけてい
た。呼びとめて聞いた。「六ちゃんは今どね
えしよん？」「お父さんもお母さんもおらん
のん」「え、？」「どつか行つとん」「旅行」
「そうじゃろう、ようしらんで」「ちがうわ
い、嫁ぎに行つとんねえから」「あんたあ先生
くえんけん嫁ぎい出とん」「六ちゃんは？」
「それやあれとこの子ビラくわしちやろうら
あ」「え、？」「先生六ちゃん来ても恐つ
ちやりんちやんな」

総合すると何処かに父も母も嫁ぎに出てい
るらしい。男の先生に行つてくれませんかと
頼んだ。「高倉あな、自転車押して行かに
やならんけんあじ私は行く決心をした。

てく／＼歩いた。たゞぶり二時間半かゝつた。よく準備を固めてみると父母は揃つて川辺へ行っている、一月も積りはないそうだ。金も未ぬ。六ちゃんは妹と弟を家に置いて同じ高倉でも山を越えた比較的裕福な農家え手依いに行く。昼めしは食べさせてもらつて、米一升をもらつて来る。それが妹と弟のその日と翌日の昼までのメシである。毎日その生活である。雨のひどい日は困る。腹をかゝえて寝る三人であらう。

「校長先生どうしまししょう。どうしましようにというても学校はどねえもならんね、民生委員の問題じゃやうけんあな教育委員に立候補しようという校長はいう。民生委員は比較的豊かな地の人である。私は少しも出まぬまゝにいら／＼していた。どうして一月も気にかけてなかつたんだらう。「あんなあまだ若いけんそねえなことを深う考えるけどなんぼでもあるこつてすでしなんぼでもあつてたまるものか。なんぼでもあるからこそ事は大きい。」

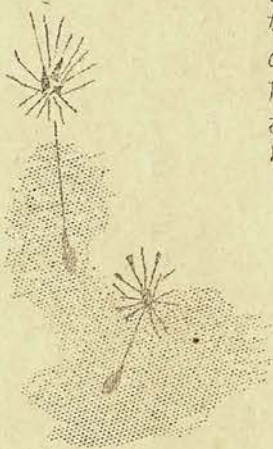
そのうちに父母が帰つて来た学校え来て云

う。涙を流しながら。

「先生久しう六う休ませましてからにすんません、けんどこんだあきちんと学校え来させますけん。せえでも六がわしらが出とる向にようしてくれましてなあー。六ちゃんも来る株にはなつた」

岡大の学生など農村に出かける。けれどもそれは何か組織があつて入り易い所に限られる。山の向うの村が日本にはいくつあるやう。僕の知っている話でもいくつもある、炭焼の人、開拓村の人、夕ムの産に波む村の人、この話も少しは考えな、らんなあと思う人があつたら、それはこの話が聞いた株な話でも實際の話だからである。いやちがう。話などというあまつちよろいもんではない。

日本そのものなのだから。



一九五四年

“日本のうたごえ”に参加して

— 平山正信 —

そ の 一

一九五四年、日本のうたごえに参加した感激を、随分おそくなりましたが報告します。

十一月二十六日、大阪駅発明星号で多くの人々の歌声に送られて一路東京に向ったのです。私達は豊能フロッグの人達と行動を共にしました。私達以外にも色々な合唱団が乗って居り、車中で歌の練習をしたり交換をしたり、美になごやかで、まさにうたごえ列車の観がありました。京都の、西陣ドンタリエーラスの人達が私達の所へやって来て、私達の所の封建的な事は近江絹糸以上です、この寂な暗い劇場を少しでも明るくしたいとつくり出したのがドンタリエーラスです、日本のうたごえに参加するのにも首切を覚悟で来たんです、と強く訴え、我々と握手を交して行きました。しっかりと握手を交し乍ら私は、この人達にとつて、うたごえを守る事は、生活を守る斗いなんだと、又中央合唱団で歌っているのは決して只うたっているのではなく、学生々活を守る斗いをしてるんだと、考えました。

翌朝、東京駅に着き、すばらしいうたごえの出迎をうけました。午市、日本教職員会館で、関鑑子先生の挨拶がありました。平和を求め、原水爆禁止を叫ぶ声は益々強くなって来ました。今年の、日本のうたごえは三度原爆を許すまじと、いう事が最大の目標です、私達はこの日本のうたごえを守り

更に大きな運動にして行きましよう」と。
次いで共立講堂に行き、六時十分、大史的な
日本のおたごえの幕はさつて落されまし
た。オ一日は地蔵のおたごえ、オ二日は農村
のおたごえ、オ三日は産業界のおたごえ、と
いう区別で、三日共、二部として、日本の
おたごえ組曲々というのが中央合唱団等に
つて行われたのです。

次に印象に残った事だけを書き留めます。

オ一日、私達は、関西のおたごえ々として出
演し、もちつきおどり、水爆犠牲者を忘れる
な、珍珍物音韻、をやり盛んな拍手を受け、ま
した。長崎の、あの子、永井隆博士の詩
によるこの歌は、しみじみと人の心にしみ込
み、戦争はもういやだとつくづく思いました。
オ一部の終了後、各国各団体からのメッセー
ジが紹介されました。中国から、シヨスタコ
ヴィツチ氏から、又、日本の各労組、団体か
ら、何百というメッセージです。日本の
おたごえ々は、まさにアジアの、いや全世界の
くろうたごえ々である事をしめています。
多くの人々が、様々な障害を乗り越えてこれに

参加しました。おたごえはすばらしい勢で広
がっています。農村から、沖繩から、又、妙
義山の山奥から参加し、土地取上反対を叫び
歌を唱う、この人達の歌声が感激を呼び起さ
ぬはずがない。それは生活そのもの、もつと
明るく楽しい生活をかちとる斗いそのものな
のです。

オ二部、高野總評事務局長の挨拶の後、中
央合唱団の合唱で、女声による誓い（久保山
夫人にさげらるうた）、女声の素晴らしいソフ
ラノで、かえして、久保山さんをかえ
して、という所など、そつとする程の迫力
でした。この迫力も単に技術だけからでなく
、原水爆を使おうとする人達への心の底から
の怒りと憎しみがほとぼり出たからこそ生
れたものと思えます。

日鋼室蘭の労働者が、アカハタ揺ればボイ
、ボリ公が棍棒ふるボイ、それがなんだ、
、ボイ、、それスクラム組もう、がっちり
と組もう、とうたうとき、それは単にうたう
だけでなく、長い斗争を通して、ボリ公の棍
棒に対し、無手で唯スクラムだけで対抗し、

それに打ち勝つための武器だったのだ、そこに限りない力強さを感じるのです。

オ二日、農村のうたごえは、昨年はなかったものです。こゝにうたごえ運動の発展が何よりはずきり分ります。各地の民謡の美しさ、豊さを始めて知った様な気がしました。

オ三日、郡立体育館は、三百余の人が入り外にも溢れているという盛況でした。三百人の人の心が一つになり掛声をかけ、拍手を送るのです。学生のようにうたごえ々々として、国際学連歌々々いぬぬ々々々が歌れました。いぬぬ々々の歌は皆の心に響かしくしみ込んで行々林にうたわれ、聴衆はじつと耳を傾けて聞き入りました。織維のうたごえ々々で近江絹糸の女工さん達が、泣き声にふるえながら詠みあけるシユアラレヒコールに涙を流さない人があつたでしょうか、静かに流れる々々灯々のハミンクの中を泣きながらあける女工さんの詩。

夜がそつと湖をつつむと

みか九色の街の灯がしずかに

湖水にこぼれる

秋の夢見たビワ湖は、こんなに平和

こんなに明るい色をしていたのに、

あなたたちの光をまいたのは、

半袖の作業衣を脱ぎすて、しまいたい

真昼のひるさがりだった

たおれそうな体をじつとこらえた

あなたたちのうめさがいくつかの山河

をこえて

私の胸をゆすぶる林だ

友よ、見た事も、話した事もなか

つに友よ

私も紡績女工だから

あなたたちの流した涙の一つ一つを

かぞえる事が出来るよ、

だが友よ、泣くだけが抵抗ではない

紡績女工はもう泣かないよ。

そうだ女工哀史を再び繰返してはなら

ない。女工さんは起ち上つたのだ、この日流

された涙がどれ程美しいものに思えた事では

よう。

三日間を通じて最も感激したのは最後に全

員が起立して合唱したときです。三万人の合唱ノ、若者よッ、平和を守れッ、民族独立行動隊ッ。何時までも——動こうとせよ。会場をゆるがす大合唱。この時の感動は生涯忘れられないでしょう。

来年は十人以上の代表を送る株今から準備

そ の

日本のうたごえの報告を兼ねたこの一文は最初、創刊号に出すつもりだったのが、發送が遅れ締切に間に合はず、ごんなに遅くなつてすみません。最初、書きたい事を相当省いても十六枚になつたのを半分にしなければならなかつたので、うたごえの雰囲気をも十分に伝えられないのが残念です。しかし私は今どうしても満足しなければなりません、それは「くまんばち」創刊号に出た藤本君の意見について、私の意見を書くのが私の義務だと考えただけです。

卒直に云つて、私は残念です、君の考え方はひどくかたよつていと云われねばなりません。この國民的大音楽運動を体験し乍ら、そ

しましよろ。私は北校合唱団員を二倍にする事、これが日本のうたごえに参加した私の義務だと思つています。皆の力で私達の合唱団を益々楽しく、素晴らしいものにして行きましよう。

二

の正しい姿を捉える事が出来なかつた。君は急流を見たのではなく、普通の流れを逆に歩き乍ら見たのだ、君は日本の國民がこれ程迄に熱狂して平和を望み、原水爆に反対していると云う事を知らなかつたのだ、だからこそその姿を眼のあたりに見た時、群衆心理的雰囲気により一政党或はかたよつたイデオロギ―にうまく支配され、利用されているとしか思えなかつた。私は君自身の「靜かに世界を眺め、客観化して自分を眺める努力をせねばならぬ」と云う言葉を君に捧げる。靜かに考える時、君はあの会に何を見るでしょう？それは平和であり原水爆禁止と云う事です。そしてそれは何もその株な言葉が宙に浮いてあ

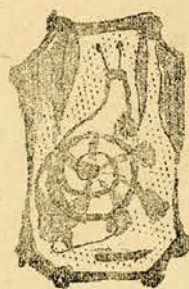
るのではなく、あの会場に集った人達の生活の中にあると云う事もある筈です。電通はじめの紡績女工や各労組のサークルの人達が夫々、職場では集つてうたうことも会社や取締から圧迫される、だが私達はうたいたい、と訴えた事を思い出さずでしょう。職場で自由にうたえる体にと望む事、これが平和を望む事ではないでしょうか？これが一政党に惑はかたよつたイデオロギーに利用され支配される事でしょうか？又多くの労組の代表は首切に反対しました、そしてその反対斗争の中でうたごえがひろまり、うたう会が出来たと云いました。斗争という事は、気が入りませんか？首切反対と云うことが氣に入りますか？しかし私達は基本的人権を護るために選挙権問題で団結して斗つた様に、労働者の人達は生きるために、団結し斗はねばならなかつたのです、これがかたよつていふという事でしようか？近江絹糸の女工さん達が、首切を覚悟で出て来て、私達はもう泣かないよ、と訴えました、これがつまりかたよつたイデオロギーという事なのか？夏川と同じ様に考える

事がかたよつていないと云う事なのか？君が静かに考える時、それらは皆かたよつたことではなく、人間として当然な事であり、それがつまり平和を求め、だからこそ又原水爆禁止という事も望まれると云う事に気づくでしょう。そして客観化して自分を眺めるとき君は、自分が普通の流れを逆に歩まながら眺めて、急流だ、と思つていたことに気づくでしょう。

君はイデオロギーが変らなかつたと云いました、あの会は何も人のイデオロギーを変えろる爲に開かれたのではないのですから、それは、でしよう。只僕は平和を求め、人の力が如何に大きくなりつゝあるか、と云う事だけは感じて欲しかつた。

日本のうたごえは全然無色透明だとは私も思いません。或るイデオロギーに確かに立っています。それは平和な生活がほしい、原水爆は厭だ、戦争は厭だ、というイデオロギーです、だから本当に平和を愛する人々に、すべて集つて、もう事が出来る会です、だからこそ毎年急速に発展して行つていふのです。

君がいぶきにかいていた、吉田さんや資本家にも来てもらえる、日本国民全体のものにしなければならぬと云う事、勿論その人達が平和を望むなら参加するでしょう。しかしその人達は、原水爆を公海で実験することに協力しますと云っているし、戦争は特需でもわかるから好きだと云っています。女工さんが集つてうたを囀え、首を切ると云つておどかします。この人達が参加してはいないと云う事がかたよつたイデオロギー或は一つの政党内に支配されていると云う事なら、かたよつてゐる方がいいではありませんか？ 藤本君がどうゆう所をさしてあの様な争をかけたのか、実際の所、理解出来なかつたので、是らくこうであらうと慰う所をかいたわけです。詳しくは話し合の会でも聞いてやりましょう。



「さあ一緒に歌おう」

安田憲弘

若人がこんなに集つた
皆んなの顔は明るい
さあ一語に歌おう
力強く平和の歌を

若き我等の歌声は
社会を染く力となる
さあ一語に歌おう
元気よく胸をほつて

さえぎるものは突き破り
ひるむ者ははげまし合い
さあ一語に歌おう
うた声は平和の力だ

自由詩 二題

サスロウ ヨシタ

大自然というものもあるのです
一人ぼつちにしてくれる
かゝる私を かゝる私として

枯草の中に顔を埋めてみるとき
思いきり 洋々と

がうーと溜息を吹きかけてやるとき
気障な日に向って
絵にかじてある寂な
冬の枯草の中で

がやく……………

永遠の逃避をちくろめというのか……………
自殺しろというのか

馬鹿 馬鹿

俺はそんな卑怯な人間じゃない
俺はそんな弱い人間じゃない

努力しろというのか

求めろと云うのか

神経のマヒするまで求めつゞける俺

俺は運命の存在を知っている

運命の前にはあまりにもちつぽけな俺

その力を知っている

葉一 藤本 四郎

冬の日 — 感傷 —

冬の日 独り居て涙流しぬ。
木の葉なく そゝり立つ木。

風もなく光あふれて

我の居る土のぬくもり、

冬の日 何故か流あふれぬ

君あれば 仲間があれば

歌をだに 歌おうものを

独り居る心のかなしさ

君思ふ心の空ろ。

君を見ぬ心のむなしさ。

木の葉なく そゝりたつ木に

何鳥か一羽来てなく。

暖かさ冬の光の中。

羽の抜けた鵪 — 自嘲 —

陽のさゝぬ大きな榊の木の下
重く青い蔭の中に

とさかはさゞみ目ばかり大きくて

羽毛を散らしてたつ鵪。

尾の羽も首の羽まで

今は散り片隅に立つ。

陽のさゝない軒端のくぼみに

羽の抜けた 鵪は立つ。

うたさえも敬わずに立つ。

「君屋上に上り給え」

——よろこび——

君、屋上に上り給え。

遠く光る海の見える日。

どうだこの張りつめた空気が。

大さいだろう。

思ふ存分吸つてみたまえ

そして思いきりはき出すのだ。

力ある歌声と共に。

君、屋上に上ろうじゃないか。

山々が銀の雪をおく日。

粉雪を越えて来る風。

このさらつとした空気が。

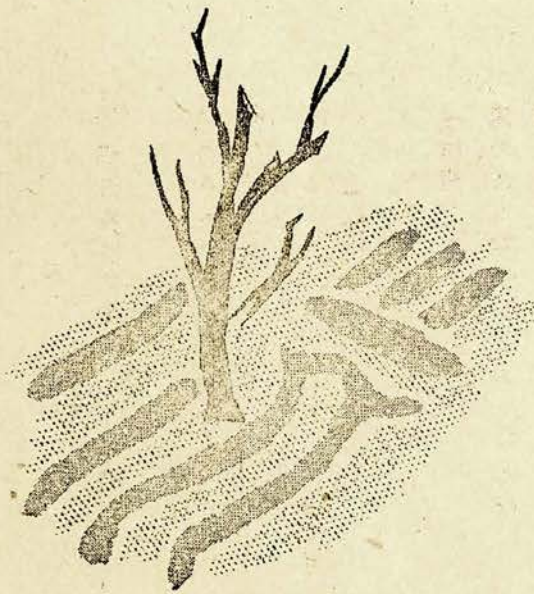
思ふ存分吸おうじゃないか。

そして歌おうじゃないか。

君、屋上に上ろうじゃないか。

空がどこまでも遠い日。

さあ！。





雄 感

小早川千鶴

私は、大学に入學するまで、社会や政治に全く無関心だった。それまで、そういう事について、深く考えさせてくれる直接の尙書がないように思っていたのだ。考えてみれば、自分の身のまわりにも随分矛盾があつたし、國全体についても、重大な変化が起つたのだつた。しかし、それらについても、私は何も考えず、自分の狭い生活のみに閉じこもつていたのだつた。

大学へ入つて、自分の今迄の世界よりはすつと広い世界に住むようになった。そして、社会というものが、否応なく、私の前に大きな存在として現われて来た。

朝から晩まで、あくせく働いて、それでも生きて行くのがやつとの大多数の人々、働く暇もなく、住む家もなく、夜になると、公園や地下道で寝る人々、パチンコに狂う人々、鷹爪に逃避する人々、独立国のフライドを一かけらもちあわせていない女達、あまりに

も混沌としすぎ、どうすればいいのかわからないぐらいだ。

みんながこんな事に苦しんでいるのに、政府は権力をほしいままにし、一層苦しい暗い生活においやううとしている。みんなの爲に発言すべき議院の中には、少数の大金持しか眼に入らず、その人達の爲に一生懸命盡している人も多い。

皆が、人間らしい生活をする事が出来、學生が勉強だけしていていゝ世の中になるために、今の政府や議院ではだめだ。衆議院は解散された。本当にみんなの幸福を考へてくれる議院をえらび、政府をつくる絶好の機会だ。我々は何ものにもごまかされないで、自分の眼でしっかりと見て、明るい国を作るための第一歩をふみだそう。

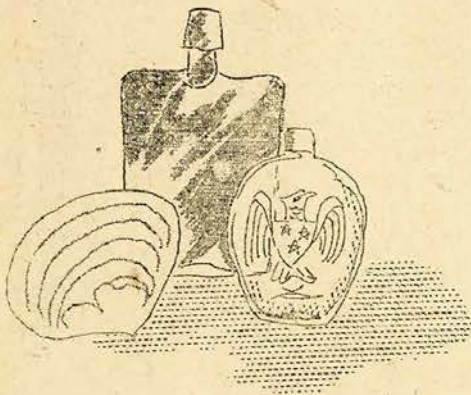
我々は、眞の独立を達成する政府を選ばねばならぬ。どんなに貧しくて、どこの国にも借りないで、精神の自由を保たねばならぬ。

今、不健全な華美な生活をするものが、將
来、我々をして、属兵とならしめ、アジアの
同胞と戦わす道につながつている。

我々若人達は、他国の隷屬下に甘んじてい
てはいけない。若人の熱情を祖国の独立のた
めに捧げねばならない。そして、健全な世の
中を作るのだ。私は、ネール首相を尊敬して
いるが、特に彼の独立運動に身を投じていた
若い時代に、植民地の若人として、共感を覚
える。我々が何もせずについて、誰が我々のこ
とを考えてくれよう。平和を希う青年として
、あらゆる戦争への道を阻止せねばならない。
我々は又、平和憲法を守りぬく政府を選ば
ねばならぬ。横文字で書かれた憲法という言
葉により、民族意識を悪用して、憲法を改悪
しようとするもの、言にだまされてはいけない
い。たとえ、はじめは与えられたかも知れな
い。しかし、その時の日本政府の尊厳は、こ
れほどすぐれた憲法を作り得なかつたからで
はないか、自分達の力でこういう憲法を作り
得なかつたことを恥じるべきだ。そして、国
民の大多数が、すぐれたものと認め、これこ

そ我々の、平和な国民の憲法だと考えている
今日、今更作つた人種云々によって改えよう
というのは、口実にすぎない。まだこの憲法
では不十分で更にすぐれたものにするために
改正するというのなら話はわかるが、今の情
勢で、改悪しようという人達をみると、それ
とは反対の方向にもつて行こうとしているの
がわかるから、我々は全力をあけて、平和憲
法を擁護するために戦わねばならぬ。

我々は、冷静に、しかし情熱をもって、真
に世界平和のために考え、行動しなければな
らない。



信正山平の生き方

信正山平

人間にあつて一番大切なものは——それは生命だ。それは人間に一度だけ与えられる。そしてそれを生きるには、あつてもなく生きて来た年月だつたと胸を痛めることのない様に生きねばならぬ。卑しい、くだらない過去だつたという恥に身を焼くことのない様に生きとうさねばならぬ。そして死に臨んで、全生涯が、また、いっさいの力が、世界でも美しいこと——つまり人類解放のための斗争にさへげられたといふ、きることが出来る様に生きねばならぬ。

このことばは有名なオストロフスキーの『鋼鉄はいかに鍛えられたか』の中の言葉です。この本に吸いつけられるパーウエル・コルチャークン

に愛憎と尊敬を感じ、その生涯から限らない教訓を積みとつた、それ以来、この言葉は私の生涯のスローガンとなつた。そして又人間の生き方はこれ以外ではあり得ないし、あつてはならないと思つた。何故か？

。人類解放の爲の斗争、何だか私達の生活と関係のない言葉のように思える。しかし私達は何の爲に学問を学び、教養をつもうとしているのか？それは皆自分の爲だろうか？

或る人はそれ思っているかもしれない、確かにそれは正しいと言え、しかしそれは一面にしかならない。例えば画家や音楽家が絵を画き作曲する事は自分の天分を伸ばし自己の芸術をより豊かにするためだと思つて居るかもしれない。しかし彼の絵や歌によつて啓蒙したり救済したりするのは彼以外の大衆だ。

そして彼自身、自分の作品を評価する場合、結局、この大衆の眼や感覚でへたとえそれを意識してはいようがいよまいが、評価する以外に仕方がないので、この世にして彼が絵や作曲を学び始めた時から、否、生誕と同時に彼は社会的な存在として自分以外のすべて

の人々に依つて影響され又影響を手えながら、つまり社会的環境と自己との相互関係の中で精神的にも肉体的にも成長して来たのです。これは誰にとつても逃れる事の出来ない人間の本質的な特徴です。この事を忘れて自分の生き方を考える事は出来ない。更に一步考えをすすめて、人間が社会的な存在で、その影響を受ける事は、又、人間が階級的な存在であり、その影響を受けることです。何故なら、現実の社会には厳として階級が存在し私達はその中で育つて来たからです。人間が階級的存在である以上、私達が生きて行く上にも、この事ははつきり秀えて行かねばなりません。この様な事実がある限りこれに目をむつて行くわけにはいかないので。若しこの事実を見ないで、教養だけの、文学だけの、人生等を論じてみた所で、それは空中楼阁に過ぎません。私達が自分自身で自分を解放し伸ばそうとしても、人間がこの様に社会的階級的存在である以上それは出来ない事です。私達はこゝで当然自己の階級的立場を明らかにして物事を考え行動して行く必要があります。

ブルジョア階級とプロレタリア階級、これが現在の基本的な階級です、私達はその両方の影響を多分に受けている。いわゆるブチスル層です。私達學生がとかくはつきりせず動揺するのはこの階級的立場からくるわけです。さて私達は当然ブルジョア階級の立場に立たねばなりません、何故なら私達の生み出す学問や芸術が全國民の5%にもみたくない人達のもので残りの九五%の人達に敵対するものであつてはならないからです。何故階級が違えば敵対するのか？同じ人間で同じか？と再び尋ねる人があるかもしれなくても一度説明します。人間は社会的階級的存在です、プロレタリアとブルジョアは経済的に従つて又文化的、精神的にも相反する利益を持つ階級です。例えば戦争へ経済的、文化的に一はブルジョアにとつて莫大な利益です、しかし労働者にとつては莫大な損失ですへ死の商人でもお読みになればい、でしよう。従つて戦争に対する彼らの考え方や行動を規制する規範——道徳が根本的に相対立しているのです。これは戦争に關してだけでなく、あらゆる

ゆる問題についてそうである事は明らかです。道徳的立場が違うのですから。

さて私は階級的立場に立ち、しかもフロレタリアの立場にたつて物事を考え行動しなければならぬ事になりました。これが私の原則的な人生に対する態度です。この立場に立つ時始めて現実の問題を正しく見、正しく解決して行くことが出来ます。以上の如く、自己を解放するよりも先ず自己のよつて立つ階級を解放しなければならぬ、又その中にこそ自己の解放、成長がある事を知るのです。だからこそ人類解放の斗争、即ち、階級をなくする事が私達の生きる目標であり、又そうでなければならぬのです。この時にこそ始めて人間は生きる価値があるのです。若し人間が自分の爲にだけ生きてゐるのなら別に生きていなくても死んでいても一向に構はないわけではありませんか。

しかしこの様に正しく生きる事は困難です。だからこそそこに苦しみ、悩みが生れてくるし、人間的な成長もあるのです。性格の強い人弱い人、その人のたずさわっている仕

事、社会的立場等によつて、その悩みも苦しみも又生き方も現象的には違つています。

しかしその奥には人類解放の四字を見つめねばなりません。木の葉が秋風に吹かれて舞上り舞下りしながら一枚一枚異つた風に落ちて行き、地上に落ちてからでさえそれ／＼ちがつた風に動きまわる様に、私達も一人一人異つた生き方をし時には舞上つたりもするが、結局、人類解放という一道路に落ちて行かねばならぬのです。しかし一道路に入つてもやはり一人一人は、違つた風に動き、違つた人間として齎つて行くのです。決して人間機械のようになるのではなく、むしろこの一道路に進まない限り個性の発露もないのです。

君は單純だ、子供だ、と笑う人がいるでしょう、しかし單純であり子供である事は力強く、美しいと思つて、一向に構はない。学生は賢名だから、物事を表から表から上から下から眺める、この事はいゝ事なのだが、困つた事に彼らは何時迄も／＼おそろく死ぬ迄それを続けるでしょう。物事をこの位置から眺めれば、最も典型的な現実の姿を見る事が

眼鏡専門・時計

西尾メガネ店

池田市石橋池前

旧・浪高踏切南へ

文具 紙製品

あかしや

阪大坂中途

(踏切手前)

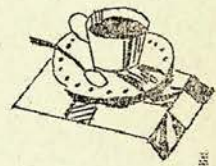
安くて 速くて
きれいに写す

藤井写真館

石橋駅西口南半丁
阪大道路踏切南入ル

出来る」と云う自己の位置をきめる事が出来ない。学生は余りに懷疑的であり過ぎる。懷疑は前進と雄信への前提でなければならぬ。アラゴンの愛と死の肖像を一度でもい読んでください。フランスを守る為に闘ったのは人類共通のヒューマニズムを説いてはお味べり屋ではなかつた。単純な平凡な人達が最も偉大な人達だつた。最後に再びオストロフスキの鋼鉄の中の労働者の言葉で終

りたいと思ひます。
「ちゃんとした目めてがあつて死ぬつてえことはたいしたもんだ。そうなるよ、人間てえもんにはかが出てくる。もしも手前のやつてる事が正しいこつたと思ふなら、がまんしてでも死な、けりやならぬくらいだ。そうすりや勇氣も湧いてくるつてえもんだ。パーウエルコルチヤーヤンの株に生きたい。これが私のすべての望みです。



野次馬根性

エー志田朝彦

皆さん、まあ／＼どうかお楽になすって下さい。何も私の名前を御覧になって鼻の上にしわを製造なさることはないじゃありませんか。これから一席并じまするは野次馬根性のお話、途中でおいやになられたならば、どうか、続けてお読になるなんて無理はなさらないように。

ところで私は、いやその先にと、カ一番に自分をかつぎ出すのは一寸どうかなどお考の方はそれ何でしたっけ、失礼、今一寸ノートを出して見ますから。ふむ成程そのつまり、国文学で云う体験分析法とか云うやつですね。つまり宇宙の森羅万象は、大は日々太陽の力クトクする位置のエネルギーを始め、小は原子核に含まれる核蛋白に至るまで、我々の抽象的体験によつてのみ、何？何のことがお分りにならない、いやそんなことは絶対に無い

はず、念のためもう一度ノートをと。……あ、こいつはしまった。皆さんどうも大変失礼致しました。実はあまりにノートを節約したためと、居眠りと、遅刻のチャンピオンと噂の高い友人のノートを借りた筈ですから。ところで本論に帰りましたと、今どこまでお話ししておりましたかしら、あ、そう／＼、私は、という所まででしたか。ではと、エヘンつまり私が時々歌をとなりに、ピアノのほとりに顔を現わすということは一つの明瞭にして明らかだ、野次馬根性の表われなんです。実を云えば、いや、もう今さら云わなくても分る位はるかなる昔から、私はかのオタマシヤクシの目刺しという奴は犬の苦手なんです、それに親父の遺言もありますんで、あれだけは手を出すつもりはなかつたんですが、それがそれ、こわいもの見たさというんです

か、それとも皆ざんがあまり歌がうまいので
一つぶ方こわしを入れようという天邪鬼のせ
いかもしれませぬが、何となく首を突込むよ
うになりまして、いややつて見ると、ピア
ノ村の浪花節の中々なもんですわ。オ一で
なつてゐる面は、丁定規に麻口、直線身が十
とこの角をなして、とかいふ悪夢からしぼら
く送れることが出来ませぬからわ。いやどうも
お話がしんみりしてしまつて相すみませんで
した。又々本論にもどりますと、そのつま
り、野次馬、つまり尾の短い馬てやつは、ど
うも人の心の青々とした草を食荒してしま
うものらしいですわ。何も私ばかりではありま
せん。どうも日本人の心の裏事は常に大義士
とかいふ人々の心の、何とおかしじつておつ
しやるんですか、いやそんなは本はありませ
ん。何しろ私は、有名天下にとどろく大義士
ですから、いやそれほどまでにおつしやるな
ら乱書でも、いやあれは先月古本屋に売つた
とすると、……いや矢張り矢張り感悪いですか
ら。つまりつい最近まで私は、代議士は大の
義士であると思つて居たんです。そのための

善意の誤解ですから、どうか平におほめの程
を。さて又々本論に歸りまして、その
つまり、代議士とかいふ方々の中には心の青
草などは、すつかり野次馬根性で食荒されて
しまつて居るも哀れな八ヶ山になつて居るの
が多かろうですわ。いやこれなどは、まだま
だましな方でもしようわ。世の中には、どうも
すさまじいのがじるようですから。朝鮮で戦
争が起つた時つしめた、もうかる」と云つて
飛び上つて喜んで人もじるそうですし、イン
ドネシアで戦火が収つてアメリカさんの特需
とやらが減ると、つれしや、もうあかん」と
かおつしやつて首に紐をかけて木の枝からス
ラさがつて、冷徹な引刀の法則によつて、殺
された人もあつたそうですし、さらに進んで
は、不自由党の何戸政訓幹事長は、米・ソが
水爆を投つけあつて、共倒れにせれば、日本
はその拘にあつて、その國際的地位を大いに
上げるだろうと、のたまわうて大拍手をうけ
たとかいふこともあるそうです。ここに
至れば、も早ソロパンを片手にして眼には馬
車馬のように黒いお、いをつけて、先のこと

は何一つ分らぬくせに、オ三次大戦の不安を食物にして居る恐るべき大野次馬ではありませんか、皆さん私達は平和への願いを集めて世界の不安を食物にして居る恐るべき野次馬根性を追ひましよう。でも皆さん、私たちがあせつてはなりません、いくら理想は高くてもむやみにそれに向つて飛付けばニュートンの法則は千リムなる力で私たちを下に引ぶり落します。一歩又一歩足下を見つめつゝ、昇りましよう。いやとうも、又お話が堅くなつたようで相すみませんでした。そのつまりですお私のいゝたいのは、野次馬でもソコバシを持ってたのは恐ろしいということなんです。そろ極めて手近にもあるじやありませんか、大学に就職予備校という、ケルトネーマンの方程式の信者が。

こんな大学の野次馬がとれだけ奥面目に勉強する大学生のさしざわりになるかお分りですか？あつと又お説教的になり始めましたからこのへんで、この雑炊文の筆をおかせて載さます。皆さん御精進感謝致します。なに尻切トンボも一興ですから。



だいが一語に暗いうちに初詣でに行く予定であつたのだがこれでは遅くなる、暗いうちに参らなければ値打ちがない、弟も起きてきたが皆まだ、支度の真最中、顔も洗っていないものもある。待ちかねて僕は一人で先に出かけた、元日の朝はどこか改まつた感じがすると云うが何の変哲もない朝だ。でも吐く息は白く空気が冷えている、まだ薄暗い空には星も残っている。家から南郷神社まで約十二、三分だ。神社に近くなると参拜をおえて帰ってくる人ばかり出合う、やはり五時では遅いなと思つ、三時四時頃から参る人だつてあるのだ。

鳥居をくぐつて本殿の前に立つ、神殿の奥を覗んで睨目し無念無想拍手フツテをうって礼拜する、三四ヶ所おがんでまわつて参拜をすまし神くじを買う、十円だと云う、神くじも高くなつたものだ昨年は確か五円だつたが、……どうせ吉が大吉下つても半吉ぐらいで凶はなからうと思ひながらそのまゝホケットのの中へ突込んで神社の獲手へ廻る。

一俵僕が元旦に暗いうちから起きて南郷神

社へ参るのは他にももう一つの大切な目的があるからである、それは初日の出をおがむことである、僕にはこの初日の出を見ることによつてその年の運勢が大体予測出来るのである。去年は起きたのは早かつたが神社へ参りにゆくのが遅くなつたので自転車で先づ廟ヶ波の海岸へ出た。しかし旭日を望めずそのまゝ南郷神社に向つたがすぐ近くまで来た所で角を曲つて真直ぐ神社の方に向つた途端、嚇然たる旭日が大きく眼の中へ飛び込んできて前方が見えなくなつたものだ、それによつて僕は幸先さよしと喜んだのであつたが今年も旭日は出ていない、向うの山の端が薄明るくなつてはいるのみだ。えゝいまゝよこちから幸運を求めて旭日を捜しにゆこうと思ひ、豪気にモテク、と長じ道をたゆまずに歩いた、ただどの家も戸をしめてはいる、誰も道を通つてゐる人がない、元旦や初日を求めて終千里などとはかさなことを考えながらどん／＼行つたが行けども行けども太陽が頭を出しかけてゐる様子には見えない、こうなれば山の土へでも登る外に手がない、もうこの上は意地

だと思ひながら向いの山をよじ登り出した、
革靴がすべる、オーバーが重い、もうすでに
相当明るいかから人家から誰かがこの馬鹿者を
見ているかもしれないと音中で感じながらや
つと上まで登り切る、しかしまだ太陽は首を
出しかけてもいなかつた、こゝから東の方向
は山があまり高くないためにこんな小山の上
からでも一望に見渡すことが出来る、藪もや
の中は延々として山又山が連なつてゐる、そ
の一番向うの空が黄金色に輝いて見える右手
は海だ、これも朝もやに包まれてゐる、もう
すぐ旭日が出てくるだろう、こゝで待とうと
思つて景色を見渡したり、先刻の神くじを出
して見たりする、やつぱり吉だ、待ち人未ら
ず、移転はよしとある。なに／＼縁談、結婚
は急ぐなだつて、出産まである、安産、親
子共に健康か、これなら二枚位買つてきても
面白かつただろう、神くじも見てしまふと所
在がないので旧大阪高校の祭歌を歌い出す、
風邪をひいたカラスのようになすげらしい声を
張り上げる、それでも胸を張り足を踏んぱつ
て二度も三度も繰返して歌う、そろ／＼いや

になつてくる、すでに夜はすつかり明け放れ
てしまつて向うの空もさつきとは大分杯子が
違う、さあもう出てくるぞと思ひながら腫を
こらしてゐると、かたの山の上は益々明る
くなつて雲を貫いて走る金色の光は次第にそ
の輝きを増してくる、遂に旭日が出る。

瞬々たる光を救ちながらその玉体を出し措
しむかのように極めて徐々に上つてくる、特
に空中に天鷲を聞く思いがする、初日の出だ
先刻から待ちくたされたことも忘れてじつと
初日を見てゐると、完全に山の上に姿を現わ
した旭日が上へ／＼と上つてゆく、之が一九
五五年の初日の出だ、今年も初日をおがんだ
もうこの上は他に用はない、しかし去年など
に比べると今年は何の出を見るまでに何と苦
勞をしたことか、之によつて之を觀れば今年
はきつと苦勞が多く又大きいに遠くない、し
かも去年見た初日に比べると今年のそれはす
つと小さい、いや確かに小さかつた、しかし
小さくても最後にはきつと旭日を見ることか
出来ることを信じて今年も頑張りうと思ひな
がら山を降りた。



胃弱通信

池上 睦子

胃の工合が悪くて少し
 学校を休んでいた時に、金井さんが家までく
 まんばち創刊号を持って来てくれた。とても
 うれしかった。金井さんどうもありがとう。
 どんなことでも、自分の思ったことをありの
 ままに自由に喜ける雑誌でなければならぬ。

先日話し合いの時に合唱団のあり方が云
 々されていたけれど、私は次の様に思う。
 普段こわい顔をしている人も、あんなにおと
 なしい人もみんな一語になつて歌を歌ってい
 る。と思う時人間のつながりを実感する。
 何だか知らないけれど共通なものがあるの
 がみんなの間に流れているのを実感する。みんな同じよ
 うに一つの世界の中でよろこび、苦しむ、悲
 しみつゝ生活しているのだと思う。少くとも
 歌を歌っている時は人生に対して、又人間お
 互同志の間に皮肉な感情を起すことは出来ない

い、そして素直な生れたまゝの心にかえる
 のを感じる。皆あまりにも大人であつては
 ならない。赤ん坊の目は星の如く清らかで
 輝いている。まず合唱団は楽しくうたえる
 ことを目標にすべきで、これより上に他の
 目標はあるべきではない。おのずから合唱
 団のうちに話し合う会が持たれるのもいい
 し、図書サークルの様なものが出るのも
 いい。しかし合唱団の目的はみんなで楽し
 く歌えることだと思ふ。

その歌なのであるが、奏さんがらくがき
 帖の中で啄木の言葉をかりて「食ふべき歌」
 といわれているが、私もそれに賛成だ。啄
 木には十七、八才頃から二、三年間、詩の
 外に何物もなかつた、その詩は何物をも空
 想化する事なしに作られたものではなかつ
 った。しかし二十才頃になつて境遇が変動
 し、一家の瀬口の責任が彼の背にかゝり、

函館、札幌、小樽、釧路と食を求めて転々と流れ歩く頃になると、詩は彼にとつて何ら関係のない物となり小説を著ころとの必死の努力にもかゝわらず、それは空しく絶望の後、やつと新らしい詩の精神が彼には味えた。それは「食うべき詩」ということであつた、その意味は、兩足を地面にくっつけて歌う詩ということである、実人生と何等の隔なき心持を以て歌ふ詩といふことである、それは御馳走ではなく、我々の日常の食物の如く我々に必奪な詩ということである。我々の生活にあつてもなくてもよかつた詩を必奪な物の一つにすることである。

それと同じことが歌について云えるのではないだろうか？歌は決して生活から浮き上がったものであるべきではなく、我々の生活に直接に關係し、いや歌うこと自身が生活であるべきだと思う。

啄木のことが出たので、一首私の好きで歌をあける。

ふるさとの山に向いて云うことなし、

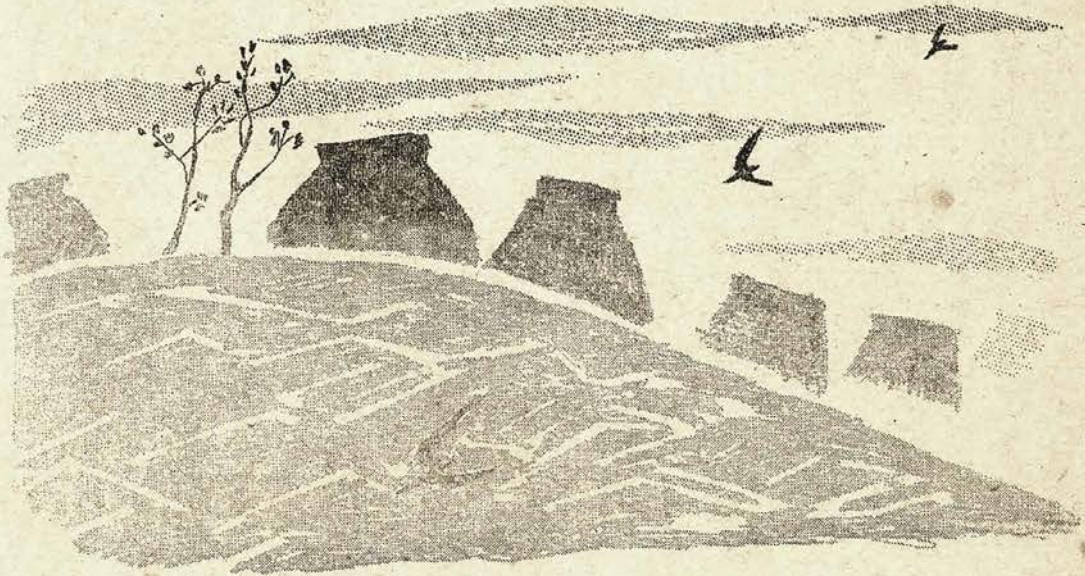
ふるさとの山は

ありがたきかな、

啄木の歌の深さは生活と結びついているところにあると思う。啄木は少年時代、神童として皆から驚きの目をもつて見られ、彼自身も両親の愛情を殆ど独占し自信にあふれ、わがま、一杯に過した。

堀合節子さんの恋愛、海軍に憧れ、ラッパスボンをばいてナポレオンを敬愛し、又ある時は校内刷新の運動でストライキをおこし校友会雑誌に活躍し、教室の窓よりかけて一人戒跡に露ころんだり、何事も思うまゝにやつて過した、中学を五年でやめて一人上京、病を得、啄木の父がかつけつけその際の放棄のため無断で寺の松を切ったことが問題で後にそこを追われる。以後啄木は生きるために生きねばならなくなる。どん底の生活の毎日、北地で彼は社会を直視した、そして國民の社会をおさえようとする社会の不合理をにくむ反抗の涙を流した、啄木の歌が私の心をうつのは單に感傷にひたる涙があるからではない。故里の貧しい人々を愛しながら理解してもう

えなげ孤独感は消えることがなかった、しかし啄木の思想の根底をなすものけ人間愛であり、故里の人をにくむ気にはとうていなれなかつた。石をもつて追わるゝ如く故里を出て東京に行つても、北地をさまよつてもふるさとを思い続けた。どんなにしたら新しい明日に近づけるかと、もがき手さぐりする時に心にかぶのは故里の山であつたのだろう、その山は彼の母であり恋人でありやさしい友であつた。涙にぬれた眼をあけて故里の山を思う時、彼の心は、小唄の心の如く素直になれたらう。ロマンチズムをレアリズムにおきかえそこからひき出すかおり高いロマンチズム、それが、この歌にあふれているように思う。私はこれを愛する。そして石川啄木を愛する。





なぜ急ぐのですか 夜宮河童

—— もつと 考えたい ——

昨年の春私は初めて高校選抜野球を見物に

行き、そこで角帽姿の場内売子をみかけました。何故角帽姿で売子をしなければならぬのかわかりませんでした、といゝますのは、帽子をかぶっていないとなんだか落着かないというのでしたら、丸帽を買えばよいのですし、そんな金がある位ならこんなことはしないよゝといわれるのでしたら、で角帽なしでは何かに差支えるのですか、短帽で登校している人も沢山いるではありませんかゝと答へたくないので、そもゝ／＼制帽はそのように、俺はアルバイトをしているのだぞゝということを示す爲の物ではない筈です。(先日の新聞にもこのような投書がありました) どうも他人攻撃的な話となつてきました。要するに私の尚題としてゐるのは特権意識や自己を必争以上に表現しようとする気持につい

てであります。

何故大学生だからといつて帽子の左右にその大学の耳章、服とオーバーのエリにバッチをつけなければならぬのですか、バッチは一つだけではいけないのですか、でもまだこのように微笑ましい風景はまだよいのですけれども、私の認識不足のせいかもしれませんが、何でも進歩的なような事であれば、そのようなことを云つたり、行つたりしさえすれば、それだけで現代をリードしているように思つてゐるらしい人がいるのです。

また選挙権の尚題で学生大会がよく聞かれていたところで、ある時、学生大会で、反動吉田内閣打倒といつた人がいました。成程、吉田内閣の下で学生の選挙権はうげわれんとしていましたが、しかしです、具体的

対策の必要なとき、何等具体性のない意見を
持出してどうするのでしょうか？

行動は時と場所に支配されてそのときそのと
きにちやんとした論理的思慮的裏付がいりま
す。どこにいても同じことを繰返していて
はいけません。だから私はこの人は少しどう
かしているな、早くいえば少しイカシテいる
と思いました。このような意見が出てくると
いうことは、何故か……、少し考えてみま
しう。

我々は大学生だということに一つの高台
を作り、それを特権意識で支えてその上から
下の方を或いは横を、よそからの眼でもって
みながら日々を過し、他の世界へ出かけてい
くときは、必ずレッテルを貼っていく、中味
等あまり問題にせず、たゞレッテルのみを大
幸にして。そしてそのレッテルへ私には、大
部分は同じような色に見えるのだが……、
の便利なことをよく知っているのかとにかく
レッテルだけは早く貼って中味は又のち程と
いう考えがあるのでないでしょうか。

あるいは自分では、そのようなことを意識し

なくても先を急ぐことばかり一生懸命にやっ
て自分が階間の中をウロ／＼して居るのを、
知らず自分の進んでいる道だけは光が当って
いると簡単に信じて一直線に進んでしまいま
す。

若い向だけの革新主義者ということがあり
ますが、何故こんなことになるかといふま
と、元来若人は新しいものを探みますが、自
意識の過剰や他名へ敢えてこの言葉を使いま
す)のためになんでも進歩的なことならやれ
という人が多からではないでしょうか。

深く知らないで、他のものにくらべないで道
を決めてしまうのは誤を含みがあります。

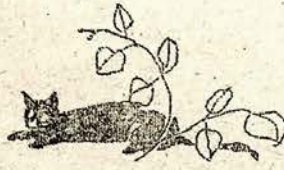
こんなことがありますが、九州といえは雪が
降らないと思う人が多いようですが、千マン
ト降ってスキーも出来るのです。

このことでも遠くから一方的に即断すること
がむづかしいことがわかります。

あまり竹馬に乗って、はしりたくないもの
です。……

こゝまで書いてきて、こんな言葉が私に向
つて言われそうな気がしました、即ち、

「お前は前進を恐れているのだ。」と。
 成程この中では私は他人のことばかり批評し
 自分の考えを述べていません、けれども私は
 前進を恐れ、日和見主義者になって、うまい
 ことをしてやろうと思っているのではありま
 せん。まだ十分なものを手にしていないので
 いや、しようと思っても入手出来ないので、
 なせ自分はいくらにうろ／＼しているのだら



無

題

うかと思つて、或いは私を助けて下さる方が
 あるかも知れないという希望の下にかゝるト
 ボケタルものを持ち出したのです。
 もっとお互に話し合い、前進しようではあ
 りませんか

あの山のそらとおく辛すむと人のいう……

(遠き屋をみつめて 山下
 一九五五、一、廿、夜)

野上晴子

私達は

赤旗の歌を歌いながら

歩いて行った

工場のどぶ川には

薄い氷がはり

空は

シリウスが冷くふるえていた

赤旗の歌は怒りをこめて
 高く、遠く

風にちぎれて儼んで行った、

九五%の町民をうらぎって

合併を強行した奴等

私達の生活をおしつぶし

再準備の地ならしをする奴等

おばさんが云った

税金は高うなるし

健保は強制的やし

どないもやつて行かれしまへん

又云った

中山も

塚本も、赤向も

うちの敵や

と

怒り、あきらめ、不信

おばさん達の頬がふるえた

生活のしわを刻んだ

瞳のそこに

暗い炎がもえていた

お隣りの豊中にくつつけたら

好都合と云うわけだ

基地をひろげるために

地方自治をぶつつぶせ

これが奴等のスローガン

それでおばさん達を

ホリ公が根柢でなぐつたんだ

公正な新国が

赤のせん動々とわめき立てたんだ

一月一日合併

これが奴等の正体なんだ

だけどおばさん

敗けにんじやない

敗けやしなよ

おばさん達を苦しめている奴と

私を苦しめてる奴と

いっしょじゃないか

ひろがって行く、

焦燥と

敗戦後の中を駆けまわって

私達はよむかける

踏まれてもたたかかれても

絶えないもの

統一と団結こそ

私達の武器

明かるい明日を

うたうために

さあ おげさん

頭をあけて

腕をくんで

もえさかる怒の炎で

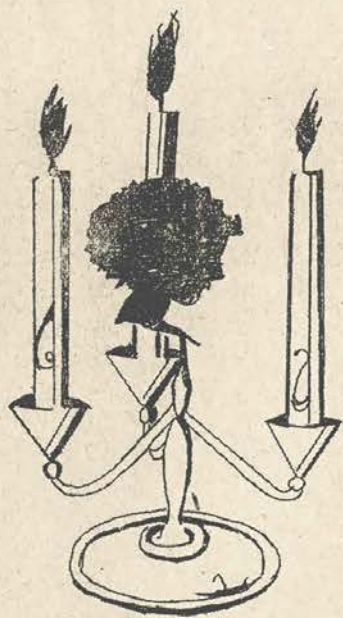
私達の武器をきたえよう と

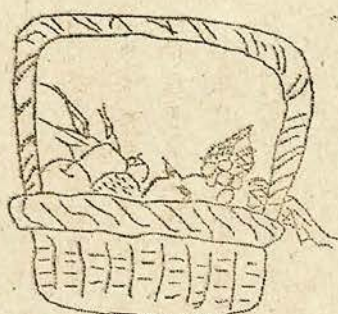
冬空に

歌声よひびけと

私は冷い風

赤旗の歌を飛ばして歩いて行った





思い出 彦行室羽

修は今日学校で話しかけた平和の運動について、ぼんやり考えにふけていた。戦争は反対だ。戦争はいやだ。戦争になると人間は人間でなくなる。こゝまで考えた時、一つの思い出がまぼろしの袂に浮び上った。

修の父は技術者として、戦時中北鮮の或製鐵所につとめていたのだ。それで終戦をその地で向えたのだ。八月十五日の終戦も尙近に追っていた或日、コソ連

の戦車が来た。女、子供は危いから家の中にかくれる。」と一人の男がふれまわつて来た。修の母は子供達を急いで呼びもどした。まもなく十台、二十台と戦車が前の道路を走つて行った。修達は窓からこれを眺めながら、「あゝ日本も負けるのだなあ」と云い合つていた。その頃から空にはソ連の飛行機がやかましく飛びまわり、戦車がカラ／＼と通る不安な日が続いた。でもまだ、日本人の社宅では、鮮人に米と着物を交換して貰つたりする程、無争だった。

八月十五日が過ぎると、鮮人の態度はがらつと変つた。小学校の五年だった修が妹達とスランゴに乗っていると鮮人の子供がやつて来てスランゴを取り上げた。妹は泣きながら「お母ちゃんに云いつけてあける」と家えかけこんでしまった。彼の母が出て来て、「いじわるしないで乗せてやつてね」と頼んだが、彼等は、「何をいつているんだい。馬鹿野郎」と相手にしない。修は無性に腹が立ち、なにかほこわくなつて、ベツをかいた。

八月も終りになると、毎日々々補給が、シ

ベリヤに連れて行かれ出した。前の道路を、えん／＼と通つて行く兵隊達は重い背のうを背負い、全く機械的に歩いて行つた。はだしのものも多かつた。どの顔も全く無表情か、或いは苦痛に満ちていた。

突然、一人の兵隊が列をはなれて道路の向う側にある畠へ向つて駆け出した。畠に落ちたら残っている大根をすばやく引き抜いて、こちらへ引きもどしかけた。とバーンと銃の音がして、その男はぼつたり倒れた。見ると馬に跨つたフ連兵が銃をかまえている。

一瞬列は止つた。二、三人のものが列を离れてかけ出し、この男を運した。まもなく、道ばたに穴が掘られ、土まじりゅうが出来た。列は再び何事もなく動き出した。

彼の父は口ひるをかみ、「兵隊は人間じやない。どうしても人間とは怒れぬ。」「と云つた。母は黙つて青く蒼つてゐる。えていた。

それからまたび／＼兵隊が通り、後人が列をはなれて畠へかけ出し、或者は同じように殺され、小敷の幸運な者がうまく大根をポケットにしのみ込ませた。

その時の兵隊の一日の配給は、生の大豆か、とうもろこしが小さなコップへ彼等はこれで水をのみ、これに配給を受けたにハ分目程であり、腹の極度にすいた彼等は、それをほりほりかじつて、一度に食べてしまふ。道はたなどに何か食べ物が見付かると、皆目を光らせて一斉にそちらを見、少しでも監視に空が見えると、飛び出して行くのである。

雨々疲れはてた兵隊が倒れる。フ連兵が来て、銃けんを突きつける。それでも彼は立ち上らない。フ連兵は馬を下りて、その兵隊の靴をぬがす。それをそばで見ている鮮人にくれてやる。無理矢理に立たされ突きとばされる。彼はこれから何十里とはだしのまゝ歩いて行くのである。

しかしどうしても歩けない病人は、たんに乗せられて行く。この病人を擔いだ四人の兵隊も自分だけをもて余しているのだ。彼等もやがてへたばるだろう。しかし彼等は別に腹を立てる様子もなく無表情に歩いて行く。彼等は人間ではないのだから。

九月も終りになると、羅津や清津から引揚

て来る人々が多くなつた。

雨の降る日だつた。生れたばかりの子供を背負つた若い母親が傷の家をやつて来た。食べるものがほしいといつた。その母親は栄養失調で全く骨と皮だけだつた。濡い着物が雨でびっしょりぬれて、付ださえずいて見える程だつた。この女は傷の母の作つた大きな襦りめしを袖つもく／＼食べた、その母親は「夫に別れ、赤ん坊は二日前に生れたのです。どうしても歩いて三十八度線突破して内地へ帰ります。」と云つていた。着物をあげてみましょうと云われても、雨で重くなるから着ることが出来ませんと云いながら、ぶる／＼ふるえていた。その人が出て行つた後で、父と母は顔を見合せて、「あの人は、どうして生きて内地へは帰れませぬね。」と云つていた。

終戦直後は一人に行き来と、フトン袋一つを持って帰ることが出来た。たぬに、一ヶ月位には一家族に行き来一つとなり、さらに、着ているもの以外は何も持たず帰れぬことになつてしまつた。又鉄道は通じていない

ので歩いて帰るより仕方なく、三十八度線を突破しそこなつたら直ちに銃殺だといふ噂も飛んだ。

夜には鮮人の保安隊の老練が家を取りまいて、逃げ出さない様、又家の中のものを持ち出さない様に見張つていた。

或日、父の居ないのを見付からつて、五六名の共産党員だといふ男達がやつて来て、家の中のものを外に運出させた。傷はたい恐ろしく、妹達と室の隅にかたまつていた。彼の母は「これだけは残しておいてくれと何度も何度も泣きついた。」又母は鏡台や、写真を集めてこつたり、懺悔をたたりした。

そんな事があつて一月ぐらひすぎた或日の事、共産党員の者が帰国の旅行券をやるから来てくれと、男達を皆連れて行つた。しかし二日過つても三日過つても帰つて来なかつた。

やがて又鮮人の共産党員といふ男が、家に入り来て、彼の家族は留置場へ連れて行かれた。その子供だといふので修達は臺の部屋に入れられた。向う側の暗い板の向には先に連れて行かれた男達が入つていた。

夜になった。一時頃になると突然「ヒュー」
「ヒュー」。「ウーウー」と何とも云われぬ声
がして来た。親日家であつた鮮人が敗産没收
の時に反抗したというので誘向されているの
だ。ちらりと見た所、天井から逆につり下げ
られ大きなやかんに入つた塩水をのまされて
いるのである。苦しみの余り少しでもこぼし
た時には、ムチでなぐられているのである。
やっている方もされてゐる方の顔も声も態度
も人間では無いのだ。

二時頃になると鮮人共産党員のものが修達
の部屋に入って来て、彼の母をちよつと調べ
る事があるからと呼びだす。母は、一番末の
弟と妹とをつわつて起す。弟と妹は泣き出す。
二人をつれて立ち上ると、その鮮人は、「う
るさい子供なんか連れて来るな、い」と、ど
なる。母は再び二人をつわつて泣かす。鮮人
は仕方なく連れて行くことを許す。彼等は彼
をつれて行ってなぐりものにしよつたというの
だ。子供を連れて行くと「こつちゆう時には、
子供があるとい、な」と鮮人は云つて、その
まゝ帰してくれるのだ。

こんな毎日が続いた。修達は全くおびえた
。入つてから二、三日は運んでくる食事も、
食べられなかつた。

日中は男達はソ連兵の雑役をした。しかし
そんな中にもやはり人間は居たのだ。修達の父
は一人のソ連隊長と偶然話し合つて、お互い
に子供を四人持つてゐることを知つた。隊長
は、妻を守りたかつた。そして、君も子供
が沢山居て大変だろうと云つて、よく乾パン
や、コンペイ糖をくれた。そんなおみやげに
修達は喜ぶの声を挙げた。

かくして八日程過つた或晩、修達は起され
て、明日は男達は皆シベリヤに連れて行かれ
るから今から親子最後の対面をさせると云わ
れて、板の間に連れて行かれた。

真暗な板の間にぎちんと坐つてゐる男達の
姿が、彼等の持つていつた一本のローソクに
ぼつと浮び上つた。男達は皆うなだれて泣
いていた。しかし修はこの時、まだわむかっ
たので悲しくも何ともなかつた。

あくる日、修達は、何處へでも行けと放り
出された。共産党員の集会所へ行つて、留置

所え入れられる時取り上げられた、六百三十
円入った財布とリツクを頼んで返してもらっ
た。

そこから出て来ると彼の母は修達に云った
。「どうしても内地に帰りましょうね。皆が
まんするのですよ。修ちゃん、リユツクが重
いなんて云いませぬね。」「はい、お母ちゃ
ん云いませぬ。」と修はうなづいた。皆もっ
い、ませぬ。内地え帰ります。」と云った。

駅の前まで来た時、戦時中修の父がよく面
倒を見てやつた鮮人にあつて奴え連れて行か
れ、又し振りに真白い御飯にありついた。修
達は「わあ真白だ！」と喜びの声をあげた。

その夜に二日留っている中にその鮮人が友
人に頼んで密航舟に乗せてもらうことになつ
た。

「やつぱり親切はして置くものね」と母は
泣いて喜んだ。外地で身寄も何もない時にさ
れた親切程うれしいものはないであろう。

真夜中すぎに、こっそりと家を出た修達は
鮮人に案内されて港へと、山を越え歩いて行
った。途中巡回の保安隊につかまると又引き

もとされるので少し進んでは鮮人が炊子をう
かಟ್ಟた。

ようやく港えついたがこの夜出る筈だった
舟は故障で二日のびるとのことだった。それ
から二日間もし見付かれれば、相手とも殺され
ると云うので、一つの部屋におしこめられ、
大きな声で話も出来なかつた。しかしまだ小
さかつた修達は大きな声でしゃべり部屋を飛
びまわり母を困らせた。

二日後の満月の夜、全く要一つなかつた。
こっそり家を出た修達はまるでとろほうでも
している様にしのび足に港への二、三町の道
を急いだ。修達も何となく恐ろしく、緊張し
て、母の云うことを良く聞いた。さいわい誰
にも見付からずに舟に乗り静かな海をすべり
出した時には、母は泣いていた。

編集集 後記

巻を待つ若芽の株に我々の合睡園にも
 大きな力が萌き上つて来た。若いのがよ
 うとする力が雑誌を通してかしくと感
 ぜられる。この力を持って新時期に望も
 う。立派な若芽を発芽させよう。見よ、
 何と明るい空ではないか！

二年生が学部というより大きな世界を
 築立って行く。我々は彼等の将来を祝福
 し、大きな発展を祈ろう。二年の諸兄連
 並びに諸姉達も北校を忘れず、我々を尊
 びて下さること、思う。

試験を真近にひかえて、急いだ爲、満
 足に編集出来なかつた点はひとえに編集
 部の責任です。が創刊号より大きく発展
 して、オニ号を出すことが出来たことは、
 一同喜びにたえません。

(H)

酒 醬油 食料品

フジサワ

石橋駅前
 電話(石橋) 三六八

新開店 阪大踏切向側

麻雀 双葉莊

桑原店 お越しをお待ちしています

お好み焼
 うどん 双葉屋

石橋商店街

酒 醬油 食料品

桑原酒店

阪大入口(産業道路路筋)

TEL 石橋三一四